

訂改 女子國文 卷八

教科書文庫
4
810
42-1923
2000065651

42176

教科書文庫

4
810
42-1923
20000 65651

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

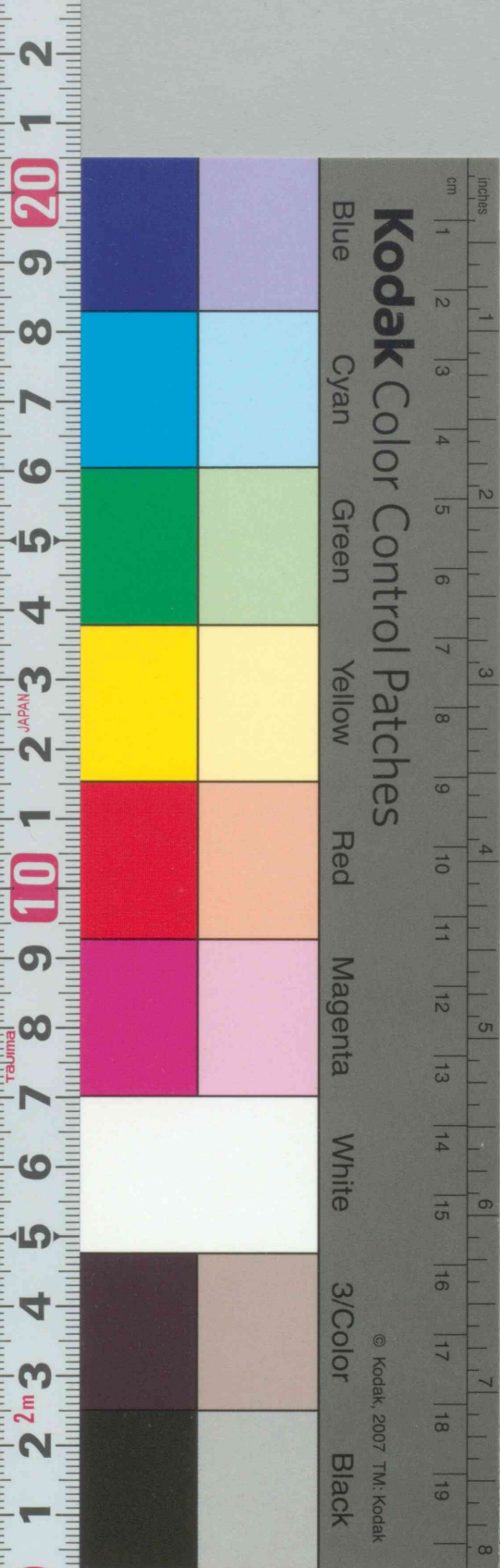


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



4b
810
大12

資料室

大正十二年四月十日
教育部省檢定濟
高等女子學校
國語教科書

広島大学図書

2000065651



教科書文庫

4

810

42-1923

2000065651

文學博士芳賀矢一編

訂改
女子國文

東京 富山房發兌



訂改
女子國文卷八

目次

- 一 大嘗祭……………一
- 二 平安京……………八
- 三 百蟲譜……………一三
- 四 太平記(落花の雪)……………一七
- 五 太平記(櫻井の驛)……………二四
- 六 神皇正統記(人臣の道)……………二九
- 七 妹に諭す……………三四

目次

八 簡易生活 (自修文) 四

九 宇治拾遺物語 (唐卒都婆に血つくる事) 四

一〇 奥の細道 其の一 四

一一 奥の細道 其の二 五

一二 雪前雪後 六

一三 川柳點 六

一四 長谷寺詣 七

一五 方丈記 (方丈の室) 七

一六 小野の深雪 (自修文) 八

一七 謠曲 (羽衣) 九

一八 小 謠 七

一九 羽衣の傳説 (自修文) 九

二〇 息女への教訓 一〇

二一 野村望東尼 一〇

二二 女をよめる歌 一五

二三 色 彩 一七

二四 我が國の繪畫 其の一 二四

二五 我が國の繪畫 其の二 二六

二六 我が國の童話 (自修文) 三三

二七 義經記 (主従の別) 三五

二八 俳句の感興……………一四

二九 名 數……………一五

三〇 曉の誕生……………一六

三一 春の樂み 其の一……………一五〇

三二 春の樂み 其の二……………一五四

三三 當今の憂……………一五八

目次終

改訂女子國文卷八

一 大嘗祭

(一)大正四年十一月。
仙洞御所
朝集所
幄舎

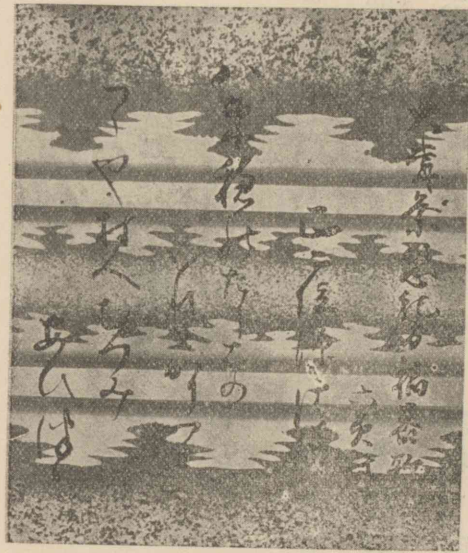
(一)十日の即位禮から引續いての好天氣、大禮日和といふ語さへ出來た。十四日の夕方から仙洞御所内の朝集所へ參集。世界に類の無い森嚴な大嘗祭は、夜を徹して行はれるのである。控所は幾室にも分れて、眩い程の電燈の光、一々呼上げる官氏名の順序によつて、左右二列に分れて、大嘗宮南板垣門内の幄舎に着席する。電燈を籠めた數箇の燈籠がホンノ

庭燎

大嘗祭悠紀
方稻春歌
六美村
八束穂の
をかりの
つかりの
つくりの
みやつ
ひつみ
つみ
あ村

國風

リと明るい。大嘗宮の柴垣が微かに認められるだけである。火焚屋に燃える庭燎は、時に明るく、時に暗い。一同の着席が



筆にび並詠綱清田黒

池むやうである。稻春歌が終つて、稍しばしのほどを経て、再び歌聲が起る。今しも國栖の國風が奏せられるのであらう。

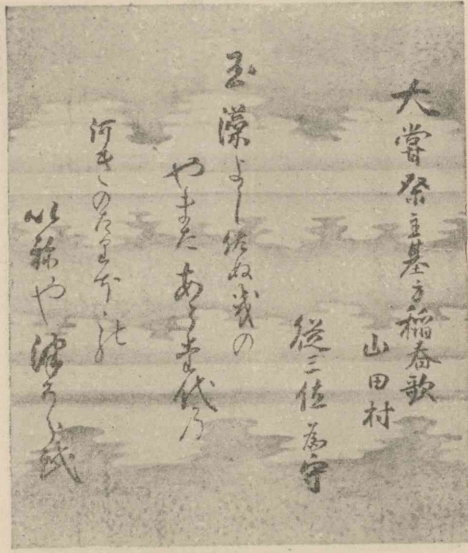
濟むと、薄明るい燈籠の火も消されて、ぬばたまの闇の夜である。

一聲長い笛の音が樂舎から起つて、稻春歌が高らかに吟ぜられる。徐に嚴かな調子で、神々しさが身に

廻立殿

大嘗祭主基
方稻春歌
山田村
玉藻よし
だめきの
の秋のた
ほの稲の
くらん

つづいて風俗歌が歌はれる。大禮使の官人が起立着席を呼ぶ毎に、或は起立し、或は着座する。闇に包まれた千餘人の參

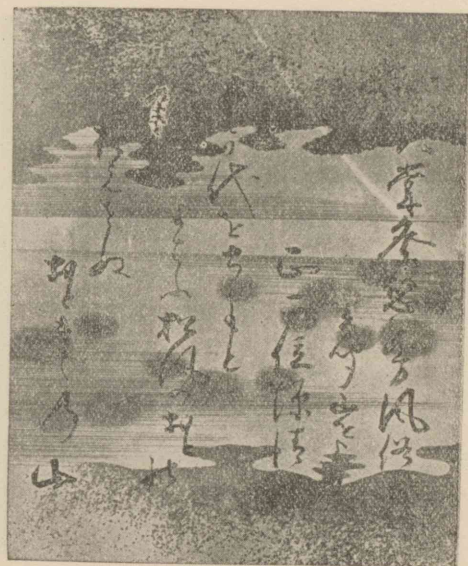


筆にび並詠子守爲江入

る様に覺える。余が着座したのは左方の幄舎で、折しも八日か九日の月が、松の葉越しに白砂の上を照す。折々一陣の寒

列員は、端坐凝念して、身は宛ら神代の昔に返つた心地である。今は掌典長の祝詞が濟み、廻立殿からの渡御もあつたのであらうと、御祭の次第を想像し奉るにも、森嚴な氣が刻々に迫

風が吹いて、古雅な單調な樂の響が、いつまでも斷えず續くのである。聖上には正に天神地祇を奉請あつて、御對坐あら



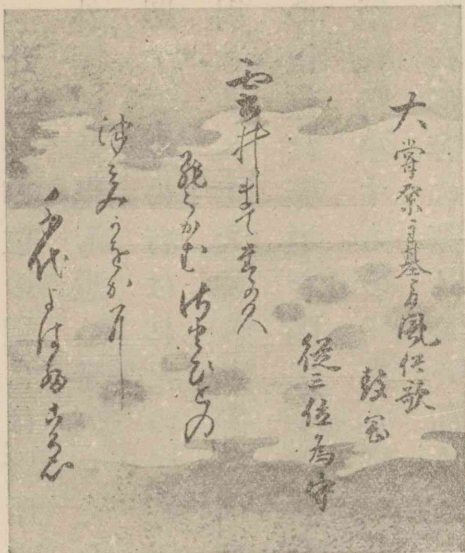
筆にび並詠綱清田黒

かくて悠紀殿の御祭が終つたのは十一時二十分の頃であつた。

大嘗祭悠紀
方風俗歌
音聞山を
よめる
君が代を
よもとよば
ふ松風の
とのおたえ
ぬおとき
の山

悠紀殿

朝集所へ立戻つて、夜食を賜はる。暖い御酒、熱い吸物、幾度か朱の御盃を傾けて、夜寒も忘れ果てる。十五日の午前一時



筆にび並詠子守爲江入

三十分、再び幄舎の座に着く。老齡の大官達が拜辭して退下したためであらう、幄舎の座席は、以前よりも廣くおぼえる。此の度は樂舎が近いので、歌樂の音も一層鮮に聞える。曉の寒さ

は三十分、一時間、次第に身に沁むと共に、嚴肅な氣分は一層に加る。樂の音が止んで、御祭の果てたのは、午前五時二十分

大嘗祭主基
方風俗歌
鼓岡
雲井までた
かくひいか
んさと人の
つみみが岡
ふに千代よ
に千代よば
ふに千代よ

であつた。朝集所に退下して、再び御酒、御食を賜はる頃、東の空は漸く明るくなつた。

十日の即位の禮には、賢所大前の儀にも、紫宸殿の儀にも、外國の使臣も悉く参列した。それは朝日の輝く御宮、夕日の照す大庭に行はれたので、莊嚴であり、雄大であつた。それに引きかへて大嘗の大御祭は、夜陰の中に行はせられる。参列の臣僚は柴垣を隔て、肅然として陛下の夜を徹しての親祭に侍坐するのである。唯「森嚴」といひ、「神々しい」といふより外に、形容の語は無い。即位の大禮に於ても、遠き國史を想ふの念は油然として湧いた。春興殿前の威儀の人、紫宸殿前の大小錦旗、古き國史の跡を考へて、いよく國家の昌運を欣

威儀の人

慶するの情に堪へず、今より六十餘年前に御建築になつた紫宸殿に對し奉つては、殊に最近五十年來の皇室の隆運を默想し奉らざるを得なかつた。此の太古の儀によらせられた大嘗祭に於ては、更に國史の各時代を超越して、西洋の文明は勿論、唐土、三韓の文化も入つて來ない神代の昔を追念して、我が國體の尊嚴無比なことに、今更のやうに感激するのであつた。

いそのかみ古りし神代の神業を
をろがみまつるけふのかしこさ

あめつちと立ちわかれけん初ありて
はてこそなけれ葦原の國

千種有功

(一)京都の歌人。
安政元年(二
五十四)歿。
五十八年

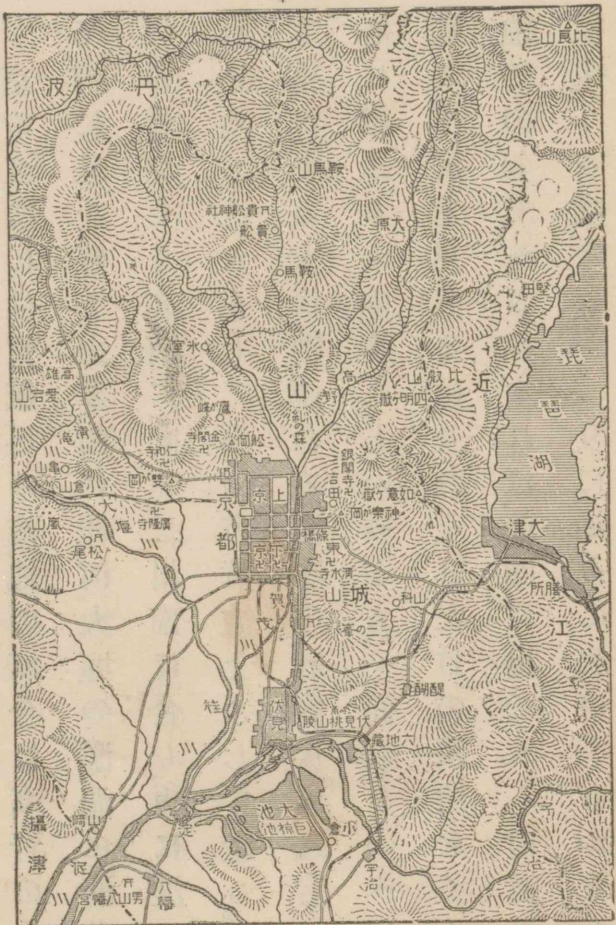
二 平安京

藤岡作太郎

エキス
摩麗幽婉

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景行く所として佳ならざる無きが中に、殊に衆美を聚めたるを京都とす。京都附近の景は日本の總べての景をエキスにしたるもの。規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、摩麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峯、高雄の山々波濤の如く、西にやゝ隔りて愛宕、小倉、龜山、嵐山、松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の緑、色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ

照りはゆ



東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍、香山、耳無の如く、近く相並びてあらねど、子の日の遊に小松曳く樂み

雪白き比
良の遠山
などは、わ
けて朝日、
夕日に照
りはゆる
色の千變
萬化なる
ぞ面白き。

宮柱太知る

など、いづれ劣らぬところから、南に稍隔りて男山之に對し、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐもかしこし。

京の東端には賀茂川の流、糺の河合に高野の支流を集めて南に珠を碎き去り、西に桂河、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく亦南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋
浩蕩
跌宕

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を心に與ふるもの少しといへども、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配やゝ急なれば、蘆間に出で入る白帆の町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水

山紫水明

姿態

を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしといへども、海なくして清き京都は益、清きなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひあらはせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所なるを知らば、三面を山にして土地濕潤に、水分を含むこと殊に濃なる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。嘗て一夏を北陸

黒雲魔の如し

の海岸に送れる事ありき。一日驟雨の至れるを見る。疾風さと吹き浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重り重りて海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散す。波が、雷か世界はたゞ一暗黒の中に没し去るかと思はれて凄じかりき。かくの如き壯絶なる景は、我が數年滞留中、遂に京都にては見ることを得ざりし所なり。されど下京より吉田に通ひたる朝なく、の景色は、今もなほ恍惚として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つく、彼方へくと淡くなりて、向ふに寝たる東山は、あるかなきかの夢より未だ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は

あるかなきかの夢

山河襟帶

隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。——國文學全史——

三 百蟲譜

横井也 有

蝶の花に飛びかひたる、優しきものゝ限りなるべし。それも、啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ、なほめでたけれ。さてこそ、^(一)莊周が夢も、このものには託しけめ。

(一)支那周代の人。孟子と同時代。世に莊子と稱す。

(1)古今集序「花
すむ蛙の聲を
きげば、生きた
の、いづれも
歌をよまざり
ける云々」
(2)古池やかし
つとびこむ水
の音「芭蕉」

(3)晋の嵇康の
交りし奇士
阮籍、山濤、向
秀、劉伶、王戎、
咸、王戎、阮
咸、王戎、阮
七賢は竹林の
賢なり

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたる
こそ幸なれ。朧月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に
飛びて、翁の目覺したれば、此の者の事、更にも謗り難し。
蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居珍しき夕、
始めてほのかに聞きたらん、又は長月の頃、力なく残りたる、
さびしき方もあり。蚊屋つりたる家のさま、蚊やりたく里の
煙など、かつは風雅の道具となれり。藪蚊は殊にはげしきを、
かの七賢の夜咄には、いかに團扇のひまなかりけん。
蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざ
かりに鳴きさかる頃は、人の汗絞る心地す。されば、初蝶とも、
初蛙ともいふ事をきかず、此のものばかり初蟬といはるゝ

(1)やがて死ぬけ
しきは見えす
蟬の聲「芭蕉」



竹林の七賢 (狩野元信筆)

こそ、大いなる手柄なれ。やがて死ぬ
氣色は見えず。と、此の者の上は、翁の
一句に盡きたりといふべし。
日ぐらしは多きもやかましから
ず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に
露おく頃ならん。つくづくぼふしと
いふ蟬は、つくしこひしともいふな
り。筑紫の人の旅に死して、此のもの
になりたり。と、世の諺にいへりけり。
哀れは蜀魄の雲に叫ぶにも劣るべ
からず。

(一)原は駿河國
駿東郡吉原
郡は同國富士
郡共に往昔
五十三驛の

むくつけき

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すにか。蜉蝣ははかなき例に引れ、蓼食蟲は物好の謗となれり。同じ寶の名によばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。蝸牛は只水にあるべき者の、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、ゆく先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。蟹の歩に譬ふべき物こそ無けれ。たゞ原(一)、吉原を、駕籠に乗りて、富士を眺めゆく人にぞ似たる。機織、鈴蟲、響蟲は、其の音の似たるをもて名を呼べり。松蟲の其の木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は

(一)秋風に結び
つねらし藤袴、
ついでりさせ
ふきりしす
なく。(古今
集、在原棟梁)

(二)又や見ん交
野のみ野のさ
くら狩花の
雪ちる春の
曙。(新古今
集、藤原俊成)
(三)河内國北河
内郡。
(四)朝まだき嵐
の山のさむけ
れば紅葉の
錦さぬ人ぞな
き。(拾遺集、
藤原公任)

殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。蟋蟀のつづりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻にすむ蟲はわれからと、たゞ身の上を歎くらんを、蓑蟲のちよよと呼ぶは、いとやさしげなり。されど、父のみ戀ひて、などか母を慕はざるならん。

— 鶉衣 —

四 太平記—落花の雪

落花の雪に蹈みまよふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひおき、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと

(一)近江國滋賀郡
 (二)買物たえず
 (三)近江より朝
 (四)白露も時雨
 (五)人住まぬ不
 破の關屋の板
 底はた秋の
 風はた新古今
 集藤原長經

願て、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。
 憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を
 打出の濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身
 をうき舟のうき沈み、駒もとどろと踏鳴す、勢多の長橋打渡
 り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子
 を思ふかと哀れなり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖濡
 れて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過行けば、鏡の山はあ
 りとても、涙に曇りて見えわかず。物を思へば、夜のまにも、老
 その森の下草に、駒を止めて顧る、故郷を雲や隔つらん。
 番場、醒が井、柏原、不破の關屋は荒れはて、なほもるもの
 は秋の雨、いつか我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜

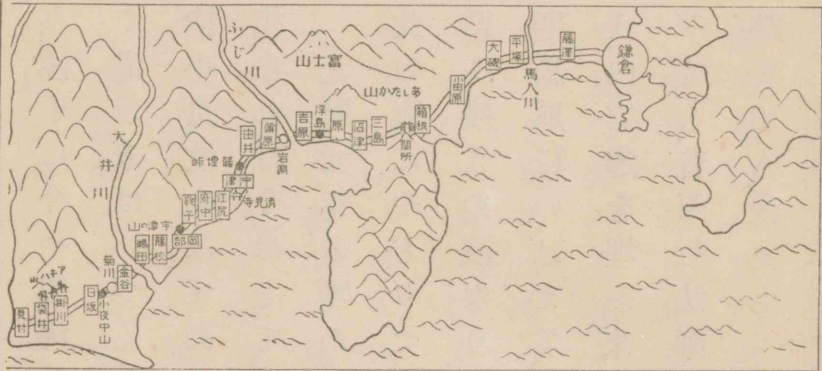
(一)うちわたす
 (二)遠江國天龍
 (三)安徳天皇の御
 (四)平清盛の子
 (五)年たけて復
 (六)命なりけり
 (七)新古今集
 (八)西行法師

み、汐干(一)に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行
 く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき
 捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入
 相なれば今はとて、池田(二)の宿に着き給ふ。
 元暦元年(三)の頃か、とよ、重衡(四)の中將の、東夷の爲に捕はれて、
 此の宿にやどりたまひにし、其のいにしへのあはれまでも、
 思ひ残さぬ涙なり。旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉を催せば、
 匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越え行け
 ば、白雲道を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望
 みても、昔西行法師が、命(五)なりけり。と詠じつゝ、二たび越えし
 跡までも、羨ましくぞ思はれける。隙ゆく駒の足早み、日己に

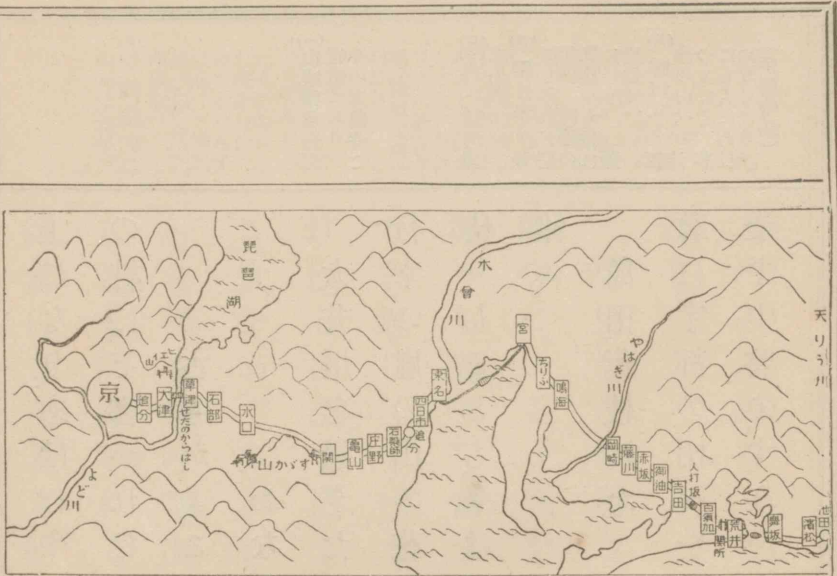
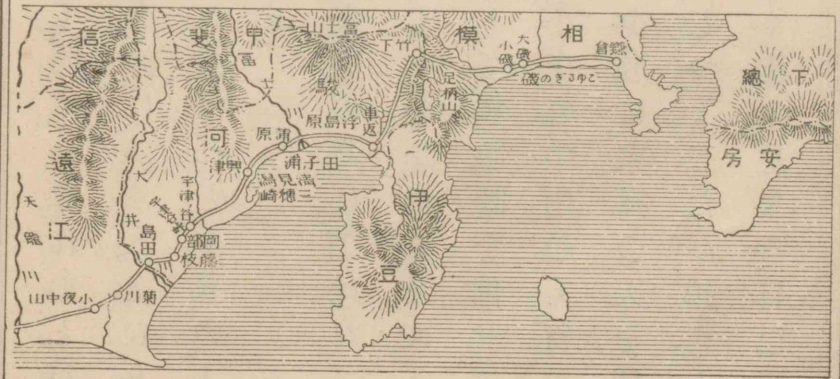
亭午
かれいひ

(一)遠江國榛原郡

(二)仲恭天皇の承久三年



亭午に上れば、かれいひ進む程とて、輿を庭前にかき止む。ながえをたよきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。と答へければ、承久の合戦の時、院宣かきたり



し咎によりて、光親卿關東へ召下されしが、此の宿にて殺されし時、昔南陽縣、菊水汲下流、而延齡今東海道、菊川宿西岸、而終命と書きたりし、遠きむかしの筆の跡、今は我が身の



(一)山城國葛野郡嵯峨にあり。今の天龍寺にあり。

(二)共に駿河國志太郡

(三)歸り來る程

(四)はなけれど朝露の、岡邊の真葛うら枯れにけり。(藤原爲家)

(五)駿河なる宇津の山への夢

(六)伊勢物語にも人にあはぬなりけり。

上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきくがはの

おなじながれに身をや沈めん

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛、龍頭鷗首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。

島田、藤枝にかゝりて、岡べの真葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山べを越え行けば、蔦楓いと茂りて道もなし。昔業平中將の、すみかを求めんとて、東の方へ下るとて、夢にも

人にあはぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見がたを過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の

關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三保が崎、興津、蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上

なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行

けば、しほひや浅き舟見えて、おりたつ田子のみづからも、う

き世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたう

げより、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐ

としもはなけれども、日數積れば七月二十六日の暮ほどに、

鎌倉にこそ着き給ひけれ。

(三)こゆるぎのいそがしめ、磯菜つむ、な沖に居れ波。(古今集相模歌)

(四)後醍醐天皇の元弘元年。

(一)駒とめて過ぎぞやられぬ清見濁ちのし、花や波の關守。(風雅集、法橋顯昭)

(二)富士の根の煙はなほぞ立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。(新古今集、藤原家隆)

(一)後醍醐天皇
の延元元年
(二)九九六
五月、九州の
大軍を率ゐて上
洛す。

五 太平記―櫻井の驛

尊氏卿、直義朝臣、大勢を率して上洛の間、要害の地に於て防ぎ戦はん爲に、兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣、早馬を進めて、内裏に奏聞ありければ、主上大いに御騒ぎあつて、楠木判官正成を召されて、急ぎ兵庫に罷り下り、義貞に力を合せて合戦すべし。と仰せられければ、正成畏つて奏しけるは、尊氏卿已に筑紫九國の勢を率して上洛候なれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候らん。御方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乗りたる大勢に驅合せて、尋常の如くに合戦を致候はゞ、御方決定打負け候ひなんと覺え候なれば、新田殿をもたゞ京都へ召し候ひて、前の如く山門へ臨幸成り候べし。正成も河

機に乗る

驅合す

決定

搦手

料簡

とてもかく
ても

勅答

内に罷り下り候うて、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ、両方より京都を攻めて、兵糧をつからかし候程ならば、敵は次第に疲れて落下り、御方は日々に随つて馳集り候べし。其の時に當つて、新田殿は山門より押寄られて、正成は搦手にて攻上り候はゞ、朝敵を一戦に滅さんこと有りぬと覺え候。新田殿も定めて此の料簡候ひなんと。たゞ路次にて一軍もせざらんは、無下にいふがひなく人の思はんずる所を耻ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戦はとてもかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。よくく遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候。と勅答せられけり。
されば列座の諸卿いづれも、誠に軍旅の事は兵に讓られ

僉議
(一)左大辨參議。

節度使
(二)延元元年正月、尊氏の上洛をさけて行幸あり。

よ。と僉議有りけるに、重ねて坊門宰相清忠申されけるは、正成が申す所もその謂ありといへども、征伐の爲に差下されたる節度使、未だ戦を爲さざる前に、帝都を捨て、一年の内^(二)に二度まで山門へ臨幸なさん事、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ處なり。たとひ尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を順へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戦の初より敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度大敵を攻靡かせずといふことなし。これ全く武略の勝れたる所にはあらず。只聖運の天にかなへる故なり。然れば只戦を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に滅さんこと、何の仔細かあるべきなれば、只時をかへず、楠木罷り下

鉄鉞

るべし。とぞ仰せ出されける。

正成、此の上はさのみ異議を申すに及ばず。とて、五月十六日に都を立ちて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成之を最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ様有りとして、櫻井の宿より河内へ返し遣はすとして、庭訓を残しけるは、獅子子を産んで三日を経る時、數千丈の石壁より之を擲ぐ。其の子獅子の氣分あれば、教へざるに宙より跳返りて、死なずといへり。況や汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、我が教誡に違ふ事なかれ。今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んこと、之を限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の

庭訓

忠烈

若黨

(一)河内國南河内郡

(二)支那古代の弓の名

(三)漢の高祖の臣高祖項羽に圍まれて危

(四)秦穆公に仕

(五)百里奚の子

を射て百發百中すといふ

祖と偽りて高代りとなり之を助く

百里奚の子

百里奚の子

百里奚の子

良弼

代に成りなんと覺えたり。さりとも一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失うて降人に出づることあるべからず。一族若黨の一人も死残りてあらん程は、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と泣くく申し含めて、各東西へ別れにけり

昔の百里奚は、穆公晋の國を伐ちし時、戰の利無からんことを鑒て、其の將孟明視に向うて今を限りの別を悲しみ、今の楠木判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びんことを愁ひて、其の子正行を留めて、無き後までの義を勸む。彼は異國の良弼、是は吾が朝の忠臣、千載を隔つといへ

一揆

きはひ争ふ

前車の轍

ども、前聖後聖一揆にして、有難かりし賢佐なり。

六 神皇正統記——人臣の道 北 畠親房

凡そ王土に生れて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ず之を身の高名と思ふべからず。されど後の人を勵まし、其の跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきはひ争ひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有難きならひなりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれ

制符

語らはる

ば、戒めらるゝもことわりなり。

鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬する事を停むべし。といふ制符たび／＼ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、此の制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりけり。

此の頃の諺には、一たび軍に驅けあひ、或は家の子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては、日本國を賜へ。もしは、半國を賜はるとも足るべからず。などぞ申すめ。誠にさまで思ふ事にはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ

言語は君子の樞機

堅き氷は霜を履むよりいたる

(一)支那上古の人。
(二)支那上古の名君。
(三)堯の時の隱士。
五臟六腑

はしともなり、また朝威のかる／＼しさも推量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むよりいたるならひなれば、亂臣賊子といふものは、其のはじめ心詞を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父これを聞きて、此の水をだにきたながりて、渡らざりき。其の人の五臟六腑の變るにはあらじ。よく思ひならはせる故にこそあらめ。

萬姓の主

なほ行末の人の心想ひやるこそあさましけれ。大かたおのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を残すべき事をばなか顧ざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に頒たせ給はん事は、推してもはかり奉るべし。もし一國づつを望まば、六十六人にて皆ふさがりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬の人は悦ばじ。いはんや日本の半ばを心ざし、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して言葉にも出で、面にも耻づる色の無きを、謀叛のはじめとはいふべきなり。昔の將門の比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐ

(一)漢帝の第一代。姓は劉、名は邦。

籌を帷幄の中にめぐらす



ひにやありけん。昔は人の心正しくして、自ら將門に見も懲

り聞きも懲り侍りけんを、今は人の心かくのみなりにたれば、此の世はいよゝゝ衰へるにや。

親 房 何、張良、韓信が力なり。こを三傑といふ。漢の高祖の天下をとりしは、蕭

像 何、張良、韓信が力なり。こを三傑といふ。漢の高祖の天下をとりしは、蕭

勝つことを千里の外に決するは此の人なり。と宣ひしかど、張良は驕る事なくして、留といひて少しきなる所を望みて

(一)後鳥羽天皇の文治五年(一八四九)
(二)藤原泰衡
(三)富山重忠
(四)昔は奥州五十四郡

封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き世のことぞかし、頼朝の時までも、文治の頃(一)にや、奥の泰衡(二)を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠(三)が先陣にて其の功すぐれたりければ、五十四郡のうち(四)いづくをも望むべかりけるに、長岡郡とてきはめたる少き所を望みて賜はりけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめん爲にや。賢かりけるをのこにこそ。

七 妹に諭す

吉田松陰

此の間は御文下され、観音様の御洗米、三日の精進にて頂き候やうとの御事、御親切の御志感じ入り申候。精進、潔齋な

(一)松陰の長妹千代子。安政六年四月十三日松陰萩の野山の獄中に於て此の書を認む。
精進 潔齋

どは、随分心のかたまり候ものにて、宜しき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候ひて、酒肴など一向食べ申さず候。其の間一度靈神様御祭の物頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にも之なく、御親切の事に候へば、相果し度存候處、當所にてはあたりまへの精進の外に、又精進と申候ひては、連中又は番人ども、何故と怪しみ尋ね申すべく候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれば、其の日一日に頂き申候。

抑、観音様信仰せよとの事は、定めし禍をよけ候爲なるべく、是には大いに論のある事に候へば、委細申し進ずべく候。

首の座に直る

大乘小乗
下根上根
ひたもの

法華經第二十五の卷、普門品と申すに、觀音力と申す事高大に述べて之あり候。大意は、觀音を念じ候はゞ、繩目に懸り候ひても、忽ちぶつくと繩が切れ、人屋に捕はれ候ひても、忽ち錠、鍵が外れ、又首の座に直り候ひても、忽ち刀が千々に折るゝなど申して之あり候。是は拙者江戸の人屋にて、此の經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終此の趣に候。其故、凡人は之より有難き事はなしとて信仰するも無理はなく候。さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘、小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定め之あり候。小乗にては、觀音は右の經文の通りのものも心得、ひたもの信仰せしむる事に御座候。これは大いに信を

起さする爲なり。信を起すとは、一心に有難い事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて、一心不亂と申すも此の事



松陰と其の筆蹟

三分出處を諸島已矣夫一身入洛を實恥身在哉
心師首高而無素立名を仰尊運亨遂之釋難才
讀書無功可憐乎三十年賦賦夫計可狂氣廿一回
人穢狂頑分柳黨衆不容身許家國分死生苦久齋
至誠不動分自方未之有人宜立志可聖賢教遠階
乙未五月吾有開左之也時暮晚深重復難期余
因以永敬若講文錄使清無窮身像者自賢之願
無窮如吾者其時不吾貌而已哉況吾之自賢乎諸
友其深敬之矣御座候以幅乃有也也
二十一回強士松陰筆蹟共書

なり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨みてもちつとも頓着なく、繩目も、人屋も、首の座も平氣になられ候故、世の

退轉

不退轉

中に、如何に難題苦患の來るとも、それに退轉して不忠、不孝、無禮、無道等仕る氣遣はなし。されど初より凡夫に、一心不亂の、不退轉のと申し聞かせても、少しも耳に入らぬもの故、かりに觀音様を拵へて信を起させ候教に御座候。之を方便とも申候。

さて又大乗と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申しても、立身出世など申す事には御座なく候。其の初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては、我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては、我が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲みを

生老病死

發し、生老病死が此の世の習なれば、是非に此の世を出ねばすまざと志を立て、年二十五の時位を棄て、山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候ひて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず。病みも死にもせぬ事を悟つて出で來て、それより世の人を教化せられたり。是が即ち出世法なり。故に、出世せずては濟世の出來ぬと申すも此の事なり。濟世といふは、即ち此の世の人を濟度する事に御座候。さて其の死なずと申すは、近く申さば、釋迦の、孔子のと申す御方は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば、有難がりもし、恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死な

塞翁が馬

ぬ人なれば、繩目も、人屋も、首の座も、前申す観音經の通りには候はずや。楠木正成とか、大石良雄とか申す人々は、又ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀の千々に折れたる證據なり。

さてまた「禍福は繩の如し」といふ事を御悟りなるが宜しく候。禍は福の種、福は禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へも残り、かつく、死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、福此の上も無き事に候。人屋を出で候へば、また如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論其の禍の中にはまた福も交り

ふざま

候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。何の効驗も無き事に、観音に頼みて福を求むるやうの事は、必ず無益に存候。されば拙者の氣遣に観音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申し聞かする方が肝要なり。

尙又一つ、拙者不孝ながら孝に當る事あり。兄弟の中一人にてもふざまのわるき人あれば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は、兄弟の代りに此の世の禍を受合ふ故、兄弟中は拙者の代りに、父母様へ孝行してくるゝがよし。さればつづまるところ兄弟中皆よくなりて、果は父母様の御仕合、

(一)小田村素太郎。松後の妹。喜子の婿。
(二)久坂玄瑞。同じく妹美和子の婿。

又子供が見習ひ候へば、子孫の爲、是程めでたき事は無きにあらずや。よく御勘辨候ひて、小田村、久坂(一)などへも此の文御見せあるべし。佛法信仰はよきことなれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、折々御見候へかし。心學本に、のどけさよ願なき身の神まうで
神へ願ふよりは、身に行ふが宜しく候。
——俗簡襟——

自修文

八 簡易生活

衣食住に簡易であることは、日本人の美德である。上代の衣服には曲玉(カマ)の様な珠をかけた事が見えたが、これとても今日から見れば、麤末(ソマ)な物しかもそれは高貴な身分の方に限られたらしい。他は概して今日の朝鮮人のやうに飾の無い白い服だけで、何

(一)元明天皇の和銅三年から延暦三年まで七十五年間。
(二)桓武天皇の延暦十三年都を平安京即ち今の京都に置かれてから、壽永三年平家滅亡まで三百年間。
(三)鎌足のとき藤原の姓を賜はつた。平安時代甚だ盛であつた。
驕奢(ウツクシ)をおこること。ぜいたくになること。
(四)藤原時平。延喜九年(一五六九)薨。年三十九。
過差(カハ)をおこり。驕奢を記した物。
(五)禁中の故事。九條右大臣。朱雀天皇に仕ふ。天徳四年(一一六二)薨。年六二。

等の裝飾も無かつた。随分文明の發達しない野蠻人でも、裝飾を好む國民は、鳥の羽を附けたり、獸の皮を附けたり、貝を飾つたりするが、日本には其の風が無い。本來が食物住居ともに簡易に甘んずるといふ風がある。
文明の進むに随つて、種々の贅澤の進むのは自然の事で、奈良時代、平安時代と、段々生活程度の進んで來たのは事實である。平安時代になつて、驕奢(ウツクシ)に流れたといふ。藤原氏など上流社會の者が奢侈に流れた事はあつたが、朝廷が驕奢をなさつて、下民の怨恨を買はれたといふやうな例は一つもない。醍醐天皇が左大臣時平と圖つて、朝臣の衣服の過差を止められたやうな類は多い。又順徳天皇の禁秘抄(カクニ)に、公の奉り物はおろそかなるをよしとすと書かれ、九條師輔の遺誠(ウツクシ)にも、
凡身(ソノミ)中家内之事、始自衣冠、及于車馬、隨有用之、勿求美麗。
とあるのは徒然草にも引いてある。外國の歴史を見ると、支那で

遺誠 薨年五十三。死時言ひおはたる。しひて取りたる。
 (一)仁徳天皇。
 (二)醍醐天皇。
 通観す 全概をすつとほして見
 淵源 おこりもとづ
 (三)平安朝の次朝の時代。源頼朝に始る。
 施政の方針 政を行ふに定

執權 將軍をたすけて一切の政を行つた人。
 明障子 只今の障子のこと。

も、西洋でも、上王者たる人が、驕奢に耽つて租税をはたつて下を虐げる。下民の怨の聲から世が亂れる。これは數へ切れぬ程多い。然るに日本にはそんな例は一つも無い。民の貧苦をあはれんで租税を免除したり、飢寒を察して御衣を脱した例こそあれ、二千年來の歴史を通観して、皇室が下民を虐げた例は決して無い。皇室は禮儀、道徳、風雅等の淵源であつたが、儉約の徳に於ても、朝廷はやはり模範となられたのである。

鎌倉になつての幕府の政は、全く勤儉で押通した。頼朝は衣服に於ても自ら其の例を示して居る。何事も質素簡易を旨とするのが、幕府施政の方針であつた。それ故鎌倉時代の話として傳はつて居るのは、儉約に關する事が多い。中にも北條時頼の儉約な話は、徒然草に味噌を戸棚から尋ね出して酒を飲んだ話がある。時の執權としては儉約なことである。其の母の松下禪尼が、明障子の切張をした事も徒然草にある。時頼の用ひたといふ青砥藤

時代の精神 その頃の世の中。一般の精神。
 家憲 一家のおき。
 法 一家の憲。
 儉素 質素。
 條文に立て 規則の中に明記してゐる。
 教理 宗教上の理。
 樹下石上 木の下の石の上。
 上野 山の上。
 野道 山の上。
 一鉢一衣 一つの鉢、一つの衣。
 雲水行脚 僧の修業のため歩くこと。
 禪味 禪のおもむき。

綱といふ人は、歴史上有つたか、無かつたか疑はしい人物である。さうなが、とにかく十文を落して五十文の松明をとぼして拾つたといふ儉約な話があるが、やはり時代の精神を示して居る。儉約をして何かの時には役に立たさうといふので、平素は麤衣麤食に甘んずるといふことは、武家を通じての教訓である。足利時代になつての各家の家法家憲ともいふべきものは、いづれも儉素を條文に立て、居る。山内一豊の妻のやうに、平素貧困に甘んじて、馬を買ふ時に金を吝まぬといふやうな心掛が、武士の妻の模範として見られた。

上に立つ武士が其の通りであつたのみならず、佛教の教理からも亦これを助けた。といふのは、武家が奨励した佛法は禪宗で、此の禪宗は樹下石上に法を説くのを主眼として、一鉢一衣の生活に満足して、雲水行脚して淡泊の生涯を送つた。いはゆる禪味といふのは、寂味を主として榮華に遠ざかつた。すべて富貴榮華

度外に視る 意にとめず、まはらない。
 超然たる態 世の中の俗事からぬけ出た。
 禪三昧 深く禪に入つて心の亂れないこと。
 義満や義政 (一)の義満や義政のおこり。
 所行 おこなひ。
 時代を支配 その時代一般の氣風であつた。
 追慕す おひしたふ。
 唐の物は藥 (二)唐の物は藥の外は無くも事々くまじ。
 無用 積みて所せくわたり來るいと愚なり。
 (徒然草)

を度外に視るといふ超然たる態度を以て、禪三昧に達するものとした。茶の味、豆腐の味が其の生命である。賑かな花やかなことは成るべく棄て、顧ない。鎌倉以後の五山の僧侶などは、學問見識を以て將軍にも頭を下げさせたが、富貴を貪らうとはしない。常に富貴に遠ざかつた態度を以て、將軍をも屈服させたのである。

(一) 足利將軍の驕奢といつても、何程のことでも無かつたらうと思ふ。金閣、銀閣を見ても大抵は察せられる。總じて世間の富貴や驕奢に近づく者は、寧ろ下品な所行として擯斥する氣風が、此の時代を支配して居た。即ち高尚といふこと、又風流とか風雅とかいふのは、富貴に遠ざかつて、簡易な生活をする事だといふ思想が流行したのである。徒然草を見よ。一方古代を慕ひ、平安時代を追慕し、皇室の儀禮を尊ぶ思想が多いと同時に、生活はすべて簡易なるがよいとて、唐から來る物は、藥の外用のある物は無いと

和歌者流 歌よみの仲
 淡泊洒落 あつさりさつぱりしてゐること。
 連歌 三十一文字の歌の上の句と下の句とを二つでよむもの。又之を連れて五十句も百句も連れるもの。
 幫間的 人にへつらひ機嫌をとるやうな意。
 閑寂 ものしづかみのあること。
 眼を眩す 富貴で目をくらませる。
 厭世 世の中をきらふこと。

まで言つたでは無いか。俳人は和歌者流に對して起つた一種の平民的文學者であるが、これも淡泊洒落を以て其の道の眞意を得るものとした。足利時代の連歌者流にも、既に其の氣風が認められるが、芭蕉の説くところ、俳味は奈良茶にありとした。奈良茶といふのは茶粥である。俳人中には品性の悪い幫間的の者もあつたが、芭蕉の風流は淡泊な生涯を風流としたのである。

右の通りであるから、俳人は其の家の飾に美しい金びかの物を用ひない。すべてが閑寂な味を以てして、一椀の抹茶に一幅の掛物、一輪の花ざして、趣味を其の中に求める。物の多くを望まず、少しにして足る。富の眼を眩するを望まず、貧しきを以て安んずる。かういふ淡泊な氣象であるから、人を羨まず、世を恨まない。禪家といひ、俳家者流といひ、隱遁世棄人に似て、實は世間に立交つて、其の榮華に心を惑はされないといふ境域に達したのである。佛教は國民を厭世にするといふが、日本では寧ろ其のよい方

富貴を超越す富貴を眼中におかない
 一斷断じて元の申
 戰に決したと
 禪宗の安心禪宗は信仰によつて心の趣く所をきめ
 離れて安心す一切の苦心を殊に
 つとめた
 似て非似たやうで居る
 積極的こちからすすんで物事を
 分を守る身分を忘れないこと

ばかりがあらはれた。其の質素の風と思ひきりのよい所、富貴を超越した點は、武士の決斷及び質素に影響したことが少くない。元寇の役の一斷などは、禪宗の安心に由來することが多かつたらうと思ふ。

此の祖先の風は、いつまでも保存しなければならぬ。併し食物も食はずに儉約するのは、もとより儉約では無い。儉と吝とは似て非なるものとは、昔の人も言つた。積極的にはたらく爲には飯も澤山食はねばならぬ。唯分を守るといふ心得が肝要である。木綿着に慣れ、麥飯に甘んじた老農は、絹布を纏ひ、白米を食ふのを勿體ないといふ。此の勿體ないといつて身の程を守るだけは、いつまでも保存したいと思ふ。恭儉己ヲ持シテ、成るべく新しい贅澤に遠ざからなければならぬ。

九 宇治拾遺物語

唐卒都婆に血つくる事

卒都婆

しみこほる

腰二重

昔唐土に大なる山ありけり。その山の巔に大いなる卒都婆一つ立てりけり。その山の麓の里に、年八十ばかりなる姫の住みけるが、日に一度、その山の峯にある卒都婆を必ず見けり。高く大いなる山なれば、麓より峯に登るほど、峻しく、峻しく道遠かりけるを、雨降り雪降り、風吹き雷鳴り、しみこほりたるにも、又暑く苦しき夏も、一日も缺かず、必ず登りてこの卒都婆を見けり。かくするを人得知らざりけるに、若き男どもも童も、夏暑かりけるころ峯に登りて、卒都婆の下に居つゝ涼みけるに、軀汗を拭ひて、腰二重なるものの杖にすが

わ
姫

りて、卒都婆の下に來りて、卒都婆を廻りければ、拜み奉るか
と見れば、卒都婆をうち廻りては、即ち返すくもすること
一度にもあらず、數多度この涼む男どもに見えにけり。この
姫は何の心ありて、かくは苦しきにするにかと怪しがりて、
今日見えば、この事問はんといひ合せける程に、常のことな
れば、この姫匍ふく登りけり。男ども姫にいふやう、わ姫は
何の心によりて、我等が涼みに來るだに、暑苦しく大事なる
道を、涼まんと思ふによりて登り來るだにこそあれ、涼むこ
ともなく、別にする事もなく、卒都婆を見廻るを事にて、日々
登りおるこそ怪しき姫のわざなれ。この故知らせ給へ。」と言
ひければ、この姫、若し主たちは實に怪しと思ふらん。かく詣

事にて

物の心知り
初む

で來てこの卒都婆見ることは、この頃の事にしも侍らず物
の心知り初めてより後この七十餘年、日毎にかく登りて、卒
都婆を見奉るなり。」といへば、その事の怪しく侍るなり。その
故をのたまへ。」と問へば、「おのれが親は、百二十にてなん亡せ
侍りにし。それに又父、祖父などは、二百餘年までぞ生きて侍
りける。その人々の言置かれたりけるとして、『この卒都婆に血
の附かん折になん、この山は崩れて深き海となるべき。』とな
ん父の申し置かれしかば、麓に侍る身なれば、山崩れなば、う
ち掩はれて死にもぞすると思へば、若し血附かば逃げて退
かんとて、かく日毎に見侍るなり。」といへば、この聞く男ども
をこがり嘲りて、恐ろしき事かな。崩れん時は告げ給へ。」など

さらなり

あやす

笑ひけるをも、我を嘲りていふとも心得ずして、さらなり。いかでかは我一人逃げんと思ひて、告げ申さぶるべき。といひて、歸り降りにけり。この男ども、この姫は今日はよも來じ。明日又來て見んに、威して走らせて笑はん。と言合せて、血をあやして卒都婆に能く塗りつけて、この男ども歸り降りて、里の者どもに、この麓なる姫の日に峯に登りて、卒都婆を見るが怪しさに問へば、云々なんいへば、明日おどして走らせんとて、卒都婆に血を塗りつるなり。さぞ崩るらんものや。など言ひ笑ふを、里の者ども聞き傳へて、をこなる事のためしに引き笑ひけり。

大らか

かくて又その日に姫登りて見るに、卒都婆に血の大らか

につきたりければ、姫うち見るまゝに色を違へて、仆れまろび走り歸りて叫び言ふやう、この里の人々、疾く逃げ退きて命を生きよ。この山は只今崩れて深き海となりなんとす。と普く告げ廻らして、家に行きて子孫どもに家の具足どもおほせ持たせて、おのれも持ちて手惑して里移りしぬ。これを見て血附けし男ども、手打ちて笑ひなどする程に、その事ともなく、さぶめき罵りあひたり。風の吹き來るか雷の鳴るかと思ひ怪しむ程に、空も暗闇になりて、あさましく恐ろしげにて、この山搖ぎたちにけり。こはいかに、と罵り合ひたる程に、唯崩れに崩れもてゆけば、姫は實しけるものをなど言ひて、逃げ得たる者もあれども、親の行方も知らず、子をも

失ひ、家の物の具も知らずなどして、をめき叫びあひたり。この
の嫗一人ぞ子孫も引具して、家の物の具一つも失はずして、
かねて逃げ退きて静かに居たりける。かくてこの山皆崩れ
て、深き海となりければ、これを嘲り笑ひし者どもは皆死
にけり。あさましき事なりかし。

一〇 奥の細道 其の一

松尾芭蕉

野田の玉川に沖の石を尋ね、鹽竈の浦に入相の鐘を聞く。
五月雨の空いさゝか霽れて、夕月夜幽かに、籬が島ほど近し。
蟹の小舟漕連れて、魚分つ聲々に、つなでかなしも。」と詠みけ
ん心も知られて、いとどあはれなり。其の夜盲法師の琵琶を

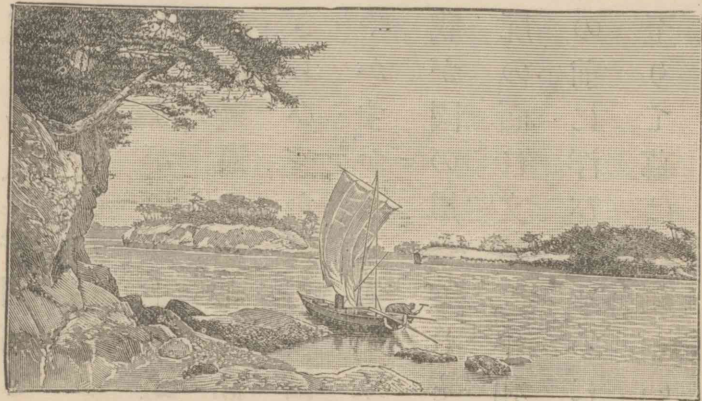
(一)陸前國宮城郡多賀城村の古碑を距る東十町許の處。六玉川の一。
(二)陸前國宮城郡鹽竈町。千賀の浦とも古歌に詠めり。
(三)鹽竈の港にある松島の一島。
(四)「世の中はつれにもあまなづこぐもまの舟の綱手」新勅撰集「源實朝」

彩椽

ならして、奥淨瑠璃といふものを語る。平家にもあらず、舞にも
あらず、ひなびたる調子うち上げて、枕近うかしましけれ
ど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。
早朝鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて宮柱太しく、彩椽
きらびやかに、石の階九段にかさなり、朝日朱の玉垣をかぶ
やかす。かゝる道の果、塵土の境、神靈あらたにましますこそ
我が國の風俗なれと、いと尊し。神前に古き寶燈あり。かねの
扉の面に、文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の佛今眼
の前に浮びて、坐ろに珍し。彼は勇義忠孝の士なり。佳名今に
至りて慕はれずといふことなし。誠に「人能く道を勤め、義を
守るべし。名も亦之にしたがふ。」といへり。日既に午に近し。船

(一)後鳥羽天皇の御代。平家亡びて三年。目。(二)八四年七。
(二)名は忠衡。藤原秀衡の子。忠衡一人父の遺言を守りて死す。義經を助け戦

扶桑
 (一)支那湖南省の北部支那第一の太湖支那支那浙江省の孤山の麓江蘇省の勝地に名あり
 (二)支那浙江省の孤山の麓江蘇省の勝地に名あり



松島

をかりて松島に渡る。此の間二里餘。雄島の磯に着く。

抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭、西湖を辱しむ。東南より海を入れて、江の中三里浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、歛つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさり、三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉沙風に吹撓められて、屈曲自ら矯めた

(一)土佐の人。有名なる高僧。仙臺侯招いて松島に瑞巖寺に住せしむ。後光明天皇特に紫衣を賜ふ。

(二)俗稱河合宗五郎。蕉門十哲の一人。寛永十一年(一六三四年)歿。年六十八。

る如し。千早振神代の昔、大山祇のなせるわざにや、造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきにて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穂、松笠など、うち煙りたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懐かしく立寄る程に、月海にうつりて、晝のながめ又あらたまりぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほととぎす 曾良
 予は口をとびて、眠らんとしていねられず。舊庵をわかる

(一)山口素堂。俳人。享保元年(二二七六)歿。年七十五。
 (二)醫者。芭蕉の友人。
 (三)鯉屋杉風。芭蕉の門人。享保十七年(二二九二)歿。年八十六。
 (四)芭蕉の門人。

雉兔芻蕘
 (五)今の石巻町。北上川の河口。人口約二萬。
 (六)「すめらぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがね花さきく。」(萬葉集卷十八 大伴家持)

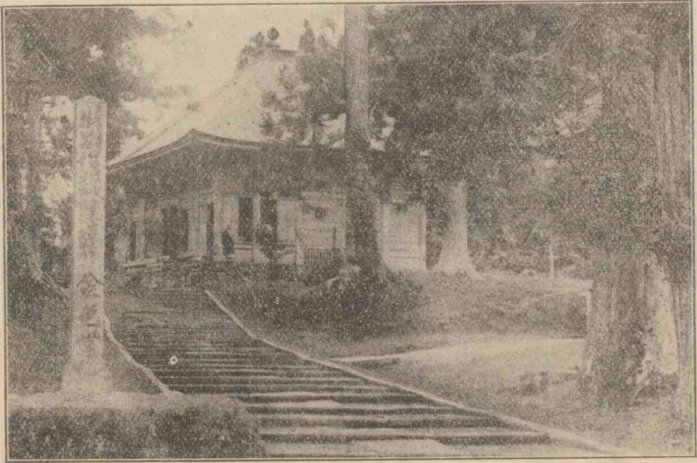
る時、素堂松島の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。かつ杉風、濁子が發句あり。

一一 奥の細道 其の二

十一日瑞巖寺に詣づ。當寺は三十二世の昔、眞壁平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。其の後雲居禪師の徳化に依りて、七堂葺改りて、金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりけり。かの見佛聖の寺はいづくにかと慕はる。

十二日、平泉へと志す。聞傳へたるあねはの松、緒絶の橋など、人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道。そこともわかず。終に路ふみたがへて、石の巻といふ湊に出づ。こがね花咲く。」と詠み

まどし



堂 色 金

て奉りたる金華山、海上に見渡され、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて、竈の煙立ちつづきたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。辛うじてまどしき小家に一夜を明して、明くれば又知らぬ道迷ひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まの萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一

(一)陸中國西磐井郡平泉村。
 (二)清衡
 家衡
 基衡 秀衡
 國衡
 泰衡
 忠衡(和泉三郎)

(三)「國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。白頭搔更短。渾欲不勝簪。」
 詩(杜甫)春望

宿して、平泉に到る。其の間二十餘里ほどと覺ゆ。

(二) 三代の榮耀、一炊の中にして、大門の址は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を残す。まづ高館にのぼれば、北上川は南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てゝ南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。
 (三) 「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢のあと

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し

頽廢

光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の屏風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍みて、藁を覆ひて風雨を凌ぎ、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

——奥の細道——

一二 雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霰も霽も天より降るものゝ面白からぬはなき中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の天空を蓋ひて、風無き寒さに雀ふくらむ程は、ともあれかくもあれ、そと下す風に連れて、ちらく／＼と降

りいづる初より、檐の玉水日に耀ふ光、長閑に融けつくす終まで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、檜の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳返しなどしつゝ、さらさらと降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく軽らかに降りて、落つる間も無く色なき水の昔にかへる淡々しさも懐かしく、消ゆるくも少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松、梅、樅なんどの梢には天華俄に落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。されど降る最中の雪の見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣なほいと盛なる時のことなり。寒さ甚だ

鹿子斑

天華

まだし

蘆絮
虚無に封ず
縹渺をあざむく
瓊瑤
蜃樓

玉屑珠塵

しからねば、雪細かならず、暖さまだしければ、雪は水めかずして恰も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、其の霏々紛々として盛に降るに當つては、櫻花の春天に翻るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて、仙境の縹渺をあざむき、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで、蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限りなり。

すべて降る時の眺には、廣き所よりも狭き所好し。玉屑珠塵いと清き事は清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる最中は、遠きは全く見えずして、廣きは却

渣滓

(一)馬をさへながむるゆきのあしたかなし
(芭蕉)

(三)いづれも山城國の西南にある山

つて狭くなり、近きは聊か霞みて、狭きは却つて廣くなり、大川よりは山間の溪よろしく、廣野よりは市中の園よろし。霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひつくして鏡新に明らかなる空の蒼々と朗なるが下に、渣滓鍊去つて銀曇なき地の皎々と白きが、見る目もはゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の、取り所なきだに面白く思はる。馬をさへ眺むると人のいひたる旦、朝日の光いと花やかなるに、疎林の禽起つて飛んでまた還る、有りふれたる郊外のさまながらよし。

西の京は金閣、銀閣、眞如堂、岡崎、東山、清水みな畫とすべし。梅尾、檳尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寢覺の床の巖

鬼斧 藍靛

(一)麴町區にあり、日枝神社を祀る。
(二)もと山王臺の東南麓。今は埋めて宅地となる。

敗荷 一撮

は鬼斧に任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脉徐に流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢おもく、璧の簪を戴ける松のむら立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓に鳴きたるなんと、二十年の昔の、余の胸に猶あざやかなる心地す。

東の京は御溝の水穩かに、浮寢の禽の夢も安けく、雪に閑かなる大御代の午、又類なくめでたし。山王臺今猶好からんが、溜池のありし昔いたづらに懐かし。不忍の池一望千里の景はいはずもあれ、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、之も捨てがたき風情なり。暮れて猶暮れがたき雪の暗夜に、何をかものいふ鳴のさぶめきを聞きたる、水に色なく、聲に

(一)隅田川の右岸、淺草公園に近き小丘。
(二)深川區、越中島より京橋區新佃島に架したる橋。
(三)越中島の一の名。

白さありとやいふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野をわきて流るゝ川なりといふべし。相生橋の橋長く、中島の島の小なる、取出でて言ふべきにはあらねど、南に涯なき海をすかして、海鷗も雪に曇る渺々たる景色を、欄干の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫となしたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。

— 洗心録 —

一三 川柳點

今年こそ大晦日には早く仕事をしまひ、ゆつくりと年を

大晦日

取るべしと、何れの家も大晦日には其の心掛をなせども、何がさて一年の終の日とて、せつかくに外向の用を濟ませば、家内の用向、元日の支度に、とう／＼夜に入りて、大騒のうち、に舊年、新年の境目なる十二時の時計は鳴つて、舊年の終の事を爲しつゝ、はや既に新年に入るの類は、何れの家も珍しからぬと見え、古き川柳にも、

据風呂に下女がゐるうち春になり

蓋し、家内總じまひの殿として、下女が風呂に入る頃は、はや十二時を過ぐるごとと見えたり。昔も今も變らぬものは此等の有様なり。

川柳ほど氣の利きたるものはなし。

(一)吹くからに
秋の草木のし
をるれば、む
いふらん、と
いふらんと、
五十集、或屋
康秀
(二)人には告げ
よあまのつり
ぶれ、草もか
人目とおもへ
げれぬとおも
人に知られて
来るよしもが
人のいのちの
惜しくもある
かな、おひそ
おみそめし
か、おみそめ
秋は来にけ
り、人も身を
うらみざらま
人づてならで
いふしもか
な、おみそめ
人こそ知られ
し、かわく間も
以上百人一首

(一)むべ山のなかに嵐の年始客
 これも實際有りさうなることなり。又曰く、
 歌(二)がるた人といふ字に手が五つ
 此等も昔の句ながら、今も同様、カルタの句の頭字の人とい
 へるには、五つどころか、一時に十の手も出づべし。又曰く、
 一日の御慶炬燵へ取りよせる
 旦那様帰宅の後、夜分に入り、どれく、新年の名刺を持って來
 よ。と言ふは、何れの家も似たるものなるべし。又曰く、
 上るなと言はぬばかりの帳を出し
 これは、今の若き人には分らぬかも知れず。今ならば左の如
 く言ふを可とす。

中
の
下
の
句
の
頭
に
人
の
字
あ
る
歌。

上るなと言はぬばかりの箱を出し
 これは、名刺入れの箱と知るべし。又曰く、
 嫁の出るまではまだるい歌がるた
 佳興に入る頃は、若き嫁さんまで一座に飛入る。カルタの花
 の盛なるべし。又曰く、
 櫥たね子こに同居駒下駄と福壽草
 これも町家の狭き處には、往々見掛くる實景なり。
 凡そ川柳は、突如として來り、初より其の題を言はぬとこ
 ろに妙味あり。
 芭蕉は飛込み道風は飛上り
 若し此の句の前に題を蛙と書きたらんには、興味薄かるべ

出し扱(一)支那の王。姓は姫、名は昌。太公望を渭水の邊に得て國を盛にす。

(一)源三位頼政の家に來、猪俣

し。其の出し扱なるところ面白し。
釣れますすかなどと文王(一)そばへ寄りの如き有名なる句も、其の突如として出づる處に妙あり。
釣りなどもしてみる馬鹿な軍學者
常に文王が來るとは限らず。太公望氣取りの軍學者も困りものなり。
其の暗さ隼(二)太櫻に突當り
まさかに暗しとて、紫宸殿の大庭の櫻に突當る程にもあるまじけれども、何がなしにをかし。
右の諸句は、川柳として品のよき方なり。若し其の秀逸と稱せらるゝものを數ふれば、いづれも皆品あしく、士君子の

間に語り難きもののみ。其の愈、品あしきものほど、其の特色益、著し。

若し川柳をして今少し品よきものならしめば、蓋し詩歌中の珍ならん。
——矢野文雄の文による——

一四 長谷寺詣

幸田露伴

弓張月の漸う光りて、入相の鐘の音も収る頃、西行は長谷寺に着きけるが、問驚かすべき法の友の無きにはあらねど、問ひも寄らで、観音堂に参り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々をなぶりて、夜の嵐の誘へば、はらくと散る紅葉なんどの空に狂ひて吹入れられつ、法衣の袖にかゝるも哀れに、

(一)藤原秀郷の後裔。俗名は佐藤。清和天皇の御時、北條建久の羽上。武土。元二年二月十三日卒。年七十三。

(二)大和國磯城郡初瀬町。今は眞言宗豊山派の總本山。

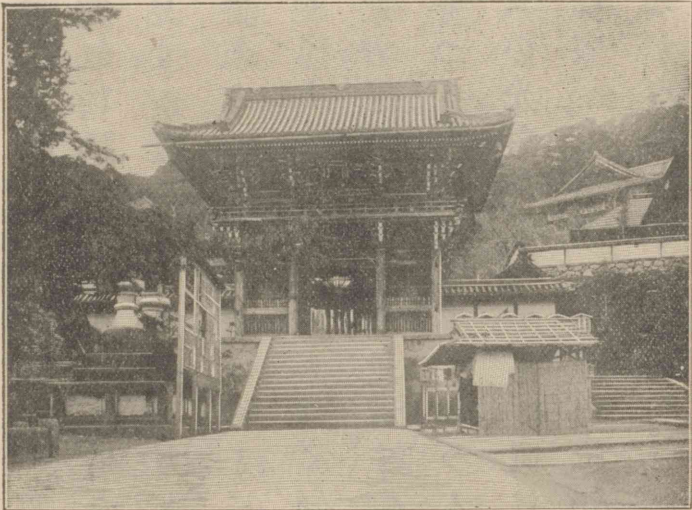
(一)法華經普門品第二十五卷は觀音經なり。

隨喜

また佛前の御燈明の瞬しつゝ、萬般の物の黒み渡れるが中にいと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、何となく平時よりは心も締りて、身に浸渡る思のすれば、猶誠を籠めて誦し行くに、天も静けく地も静けく、人も全く静まりたる、時といひ、處といひ相應じて、我が耳に入るは我が聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神などの、聲を和せて共に誦するかと疑はるゝまで、上無く殊勝に聞え渡りぬ。特に参りたるかひは有りけり。菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作をば善しとして、必ず納受し給ふなるべし。今宵の心の澄切りたる、此の清しさを何に比べん。餘りに有難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら、此の御堂の片隅に

跌坐

沈々



も睡れる如くになりぬ。右左に並びて立ちたりける御燈明

なり跌坐して、曉方になほ一度誦經し参らせて、さて其の後香華をも淨水をも供して罷らん。と、西行やがて三拜して、御佛の御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水か、枯れし木の、動きもせねば、音も立てず、寂然として坐し居たり。

夜は沈々と漸く更けて、風

所化

は、一つ消え、又一つ消えぬ。今は唯いと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢の如くに残れるのみ。此の寺の僧どもは寒氣に怯ちて、所化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに終に見する者無し。いふべき方も無く静かなれば、日比焼きたる餘氣なるべし、今薰ゆるとにはあらぬ香の、有るか無きかに自ら匂を流すも、いと能く知らる。かゝるをりから、何者にか此方を指して來る足音す。御佛に仕ふる此の寺の者の燈燭ともしひをつぎ參らせんとて來つるにやとうち見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや、頭には何やらん打被きたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を留むとにはあらざれど、何とし

僧形

高さは高し
互の程は隔りたり

も無く、なほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方へ身を入れたれば、定かには知れぬながら、此の御堂に打向ひて、一度はまづ拜み奉り、さて静々と上り來りぬ。御堂は狭からぬに、燈は螢ほどなり。燈の高さは高し。互の程は隔りたり。此方を彼方は有りとも知らず。彼方を此方は能くも見得ねば、西行は唯我と同じき心の人も亦有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。彼方は固より闇の中に人有る事を知らざれば、何に心を置くべくも無く、御佛の前に進み出でつ。いとつゝましげに畏りて、數多度合掌禮拜し、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり。其の心操の浅まならぬも、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨ち得ざれば、面はまして見るべ

菩提の友
浅ま

卒爾

くは無けれど、浄土の同行の人なるものを、呼掛けて語らばや、名をも問はずやと、西行は胸に思ひけるが、卒爾に物言はんは悪しかるべし。祈願の終つて後にこそと、心を控へて窺ふに、彼方は珠數を取出し、さやくとばかりすり始めたり。針の落つる音も聞くべきまで、物靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、水精の珠數を擦る音の亮らかなる響いと冴えて神々し。御經は心に誦すると覺しく、萬籟絶えたるに、珠の音のみを唯緩やかに響かす。其の聲、或は明らかに、或は幽かに、或は高く、或は低く、寢覺の枕の半ばは夢に霞の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に、菡萏かんたんの急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友ずれか、山吹匂ふ山川の

萬籟

萬法

浄土の同行

蛙鳴くかと過たれて、一聲聲中に萬法あり、皆與實相不相違背ことといとをかしくも聞きなされるれば、西行感に入つてありけるが、期したる程の事は仕果てしにや、其の人珠數を収めて、御佛をば禮拜すること數多度しつ、やをら身を起して退らんとす。菩提の善友、浄土の同行、契を此の上に結ばんには、今こそ言葉を懸くべけれど、

思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みて

おぼえずたまる我が涙かな

と、歌の調は好かれ、悪しかれ、西行俄によみかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひかけぬに驚きしが、何と仰せられしぞ。今一度と、心を押鎮めて問ひかへす。聞きとりかねけん

しどろもどろ

と猜するまゝ、思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みて。」と復び言へば、後は言はせず、君にておはせしよ。こはいかに。」と涙にふるふおろく、聲、言葉の文もしどろもどろに、身を投伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたも無き、其の昔の我が妻にぞありける。

—二日物語—

一五 方丈記—方丈の室

鴨 南 長 大 明 天

うたかた

ふ 蔓をあらそ

行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え、且結びて、久しく止ることなし。世の中にある人とすみかと亦かくのごとし。玉しきの都のうち、軒をならべ、蔓をあらそへる、たかきいやしき人の

すまひは、代々を経て盡きせぬものなれど、之をまことかと

尋ねれば、昔有りし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造

り、あるは大家滅びて小家となる。住

む人も之に同じ。所も變らず、人も多

かれど、昔見し人は、二三十人が中に、

僅かに一人二人なり。朝に死し夕に

生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たり

ける。知らず、生れ死ぬる人、何方より

來りて、何方へか去る。又知らず、假りの宿り、誰が爲に心を惱

まし、何によりてか目を悦ばしむる。其のあるじと住家と、無

常を争ひ去る様、いはゞ朝顔の露に異ならず。あるは露おち



鴨 長 明 像

無常を争ひ去る

て花残り、残るといへども朝日にかれぬ。或は花凋みて、露なほ消えず、消えずといへども夕を待つこと無し。

わが身父方の祖母の家を傳へて、ひさしく彼の所に住む。其の後、縁かけ身おとろへて、忍ぶかたぐし、しげかりしかば、遂に跡とむることを得ずして、三十餘にして更に我が心と一つの庵を結ぶ。之をありし住居になずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へて、はかぐしくは屋を作るに及ばず。わづかについちをつけりといへども、門たつるにたづきなし。竹を柱として車やどりとせり。雪降り風吹くごとに、危からずしもあらず。所は川原近ければ、水の難ふかく、白波の恐もさわがし。すべてあらぬ世を念じすぐしつゝ、心を

(一)住みわびて
我さへ軒のし
のぶ草、しの
ぶかたぐし
げき宿、なし
(金葉集、周防
内侍)
(二)高倉天皇の
晩年。安元治
承の頃。

たづき

(三)賀茂の川原。

(一)長明が五十
歳の春、後鳥
羽天皇建久の
頃。

(二)一名小鹽山。
山城國乙訓郡
の西。京都

(三)土御門天皇
建永の頃。

悩ませること、は三十餘年なり。其の間折々のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。乃ち五十の春を迎へて、家を出で世をそむけり。もとより妻子無ければ、捨てがたきよすがも無し。身に官祿あらず、何につけてか執をとどめん。空しく大原山の雲に、いくそばくの春をか経ぬる。

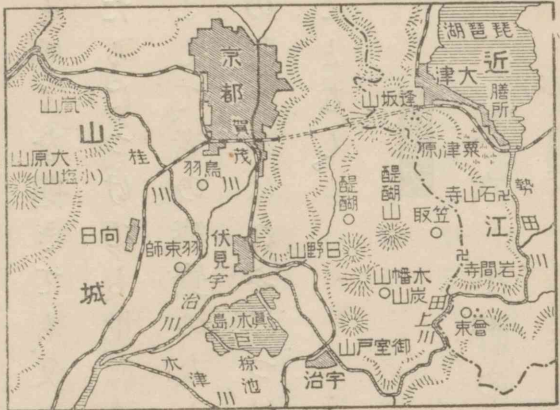
こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べる事あり。いはゞ旅人の一夜の宿を作り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、又百分の一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々に傾き、住家は折々にせばし。其の家の有様よの常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺ばかりなり。所を思ひ定めざるが故に、地を

(一)山城國宇治郡木幡山の東北なる日野山の麓。

しめて作らず。土居をくみ、打覆をふきて、つぎめ毎にかけがねをかけたなり。もし心に叶はぬ事あらば、易く外に移さんが爲なり。其の改め作る時、いくばくの煩がある。積む所僅かに二輛なり、車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらず。また麓にひとつの柴の庵あり。すなはち此の山守が居る所なり。かしこに小童あり、時々來りてあひ訪ふ。もしつれづれなる時は、これを友として遊びあり。かれは十六歳、われは六十。其の齡ことの外なれど、心を慰むる事はこれおなじ。或はつばなを抜き、岩なしを探る。又ぬかごをもち、芹を摘む。或はすそわの田るにおりて、落穂を拾ひてほぐみを作る。もし日うららかなれば、嶺に攀上りて、はるかに故郷の空を望

(一)宇治郡高嶺の北。俗に木幡の關の址なりとぞ。
(二)紀伊郡にあたり。鳥羽も同郡。羽束師は乙訓郡。
(三)宇治の東北戸山の東北方。
(四)宇治の醜調山の東方。
(五)近江國滋賀郡石山も粟津も同郡。
(六)宇多天皇第八の皇子敦實親王の雑色實盲人にして和歌、琵琶の名手。
(七)近江國栗太郡、宇治の川上。
(八)百人一首中の歌人。年代不詳。

み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主無ければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみわづらひなく、志とほくいたるときは、これより嶺つゞき炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山を拜む。もしはまた粟津の原を分けて、蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上川をわたりて、猿丸大夫が墓をたづね、歸るさには折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとにす。もし夜しづかなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲



とにす。もし夜しづかなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲

(一)山城國久世郡。宇治川の西にあたる。
 (二)山鳥のほろ。ほろとなく、父の聞けば、父のとぞ思ふ。母の(玉葉集)行基(菩薩)。
 (三)いふ事もなく。き埋火をおこす。埋火を冬にねがめ。友しなげれば、(堀川百首)藤原國信。

に袖をうるほす。叢の螢は遠く眞木(一)の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥(二)のほろ／＼と鳴くを聞きて、父か母かと疑ひ、峯のかせきの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。或は埋火(三)をかきおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれぶにつけても、山中の景氣折につけて盡くることなし。

自修文

一六 小野の深雪

落合直文

文徳天皇の皇子に惟喬親王(四)といふがおはす。第一の皇子にましまし、かば、御位は此の親王に譲らせ給はんの叡慮(五)なりしが、

(四)第五十五代。嘉祥三年(一〇一〇)より天安二年(一〇一八)まで。御在位九年。
 (五)貞觀十四年(八四二)。

僧となり、小野の里といふ所に居給ふ。寛平九年(一〇一七)二月、薨年五十四。叡慮。天子のおぼしめし。藤原氏云々。當時藤原氏の勢が強く、つたのであつた。
 (一)第五十六代。清和天皇の御事。あぢきなく。おもしろくなく。つまらなく。髪をおろすと。僧となる。
 (二)清和天皇の御代。
 (三)山城國愛宕郡下賀茂神社のある處。
 (四)京都市の北方にあり。

紀名虎(一)の女の生みまつれるなりければ、藤原氏を憚らせ給ひて、果し給はず。良房の女の生みまつれる惟仁親王御位に即せ給ふ。御年僅かに一歳。古にも其の例あらぬ御事にや。當時藤原氏の擅なる思ひやるべきにこそ。在原業平は惟喬親王に親しう仕へまつれるものなり。いかにもして此の親王を立て奉らばやと、心を碎きしかひもなく、世の中かゝるさまになりければ、其の憤(二)またやらん方なし。惟喬親王世をあぢきなきことにおぼして、或夜ひそかに髪をおろさせ給ふと聞きまつれる業平の驚きはいかにぞや。親王はやがて小野といふ所に庵室を結びて、そこにこもらせ給ふ。こは貞觀十四年七月十一日の事とぞ聞えし。

あくる年の正月元日、業平新年のよろこび聞えまつらんとて、ひそかに出でたつき(三)のふけふ降りくらしたる雪に、鴨河(四)の森など、景色おもしろからぬにはあらねど、歌詠(五)まん心地もせず。八瀬、大原わたりに行通ふ細き山路、みな雪にうづもれぬ。いそぎに

やがて
即ち。

賤山がつ
いやしき
いみじう
非常に。

行ふ
佛道を修め
る。

いそげど、足こゝろにまかせず。松の木蔭に立ちよりて、なほ行く
方をながむるに、比叡の山、雪ことに白し。其の麓のわたり、炭竈の
けぶり細う立ちのぼれり。それやがて親王のおはする小野とい
ふ所ならん。此の雪にさぞやうづもれてましまさん。いかばかり
寒けておはすらん。早く行きて慰めまつらん。とおのれの寒さ
を忘れて君をしのびまつる。其の心は、ふり積る雪よりもげに深
し。行き／＼て晝のほど小野に着きぬ。賤の女にあひて、親王の御
かくれ家は「いづこ」といふに、「かの雪に隠れたる松原の其の奥な
り」と答ふ。いふがまに／＼分入りしに、こゝよりは賤山がつの行
通ひし跡もなし。風ふく毎に、松の梢より雪の亂れ散りくる。いみ
じう寒し。或は下り、或は上り、路なき所をたどりつゝ、からうじて
親王のおはする庵室に到り着きぬ。

訪ひまつる人し無ければ、雪に鎖されたるまゝ、門も開かず。奥
の方に讀經の聲の微かに聞ゆるは、あるじの親王の行ひ給ふな

聞えまをせ
申し上げよ。
貴き御位。
天子の御位。
常ならまし
かば
普通ならば。
有司
やくにん。
雪をふみ分
けて親王をお
たづねしやう
などとは、毫
も思ひはしな
かつた。事柄
の成行など、
忘れて、或は
夢で、はな
と怪しむとの
意。
あらましもの
のを
あらうもの
はかなき現
あはれに定め
ない。現世であ
る。

るべし。ほと／＼と門を叩くに、老いたる下部出てきぬ。誰にかお
はする。とて、門ひきあけぬ。業平尋ね参れり。其の旨聞えまをせ。と
いふ。しばしありて、讀經の聲たえぬと思ひしに、親王ははや縁に
出でさせ給ふ。それと見奉るや、笠かいやり、とく走りよりて、其の
御姿は、といひたるまゝ、詞も出でず。あはれ世が世ならんには、貴
き御位にも登らせ給ふべかりけんを、かゝる深山の奥に籠らせ
給ふはいかにぞや。思へば今日は元日なり。常ならましかば、百官
有司みな拜賀の禮を申すべからんを、門の内外みな雪にうづも
れ、此の業平の外に、あとつけたる者なきはまたいかにぞや。
わすれては夢かとぞ思ふ思ひきや

雪ふみわけて君を見んとは

こはこの折によめる業平の歌なり。

まこと夢と思ひしならん。しかもまことの夢ならば、醒むる折
のあらましものを、げに夢よりもはかなき現なりや。親王しばし

墨染の御袖の着るものは僧親王は出家せられたので之を召されるのひれふす見ゆめり伏す協息座のそばに置いて、ひちをいけて、體をよせかける小な机形のものを俗にひちかけといふ。物語してん話したいものこもこれもともかくもしてどうにかし

のほどは御詞もなかりしが、やゝありて、よくこそたづねまゐりたれ、此の雪に、「と仰せたまふ。衰ぬぎすて、縁にのぼりしに、其のかしらの雪はいかに」とて、墨染の御袖もてうち拂はせ給ふ。業平あまりの嬉しさに、縁にひれふしぬ。「こなたへ」と宣ふまゝに、奥なる一間にとほる。御床には佛像をかゝげさせ給ひ、御經机には讀みさし給へる御經など見ゆめり。親王は御脇息けいそくによらせたまひ、「なほ近う」と招かせたまふ。御手の珠數たまごいとうるはしく、御香のかをりいみじうたふとし。

業平「かゝる雪ふみわけて、かゝる所に尋ねまゐらせて、かゝる御ありさまを見奉ること、いかなる憂世に侍らん」となげき申す。親王「さることは、いはんも何のかひかあらん。けふは元日なり。こころよく物語してん」と宣ふ。さりとても御いたはしのことや。こもみな藤原氏のしわざ。業平此の世にあらん限りは、ともかくもして御恨はらし參せん」といひて、降りそゞぐ熱き涙は、此の寒き

さのみはあまりしひては。

路のくまみちのすみ。

ワシテ
ツレ
三保とも
白天人
漁夫

に凍らざりしなるべし。とかくする程には、や夕暮近うなりぬ。此の雪の晴間に、御暇つかまつらん」といふに、「今しばし」とてとゞめ給ふ。今日は病のむね朝廷に聞えあげ、忍びくゞに尋ね參らせしなれば、これにて御暇賜はらん」と申すに、親王もさのみはとゞめさせ給はず。業平、新年の公事くわじなど果てたらんには、またこそ尋ね參らせめ。朝夕寒さを厭はせ給へ」と聞えあげしに、「汝も路の程心してよ」と宣ふ。

業平泣くく、御門を出てぬ。親王はし近う出て給ひて、見送らせ給ふ。折れめぐる路のくまに、立ちとまりてかへりみする折しも、比叡山ひがし風さと吹きて、またも降りしきるに、かなたは見えずなりぬ。こなたも見えずなりたらん。あな心無こころなの此の雪や。

一七 謠曲—羽衣

ワキ一聲「風早(一)の三穗の浦曲をこぐ船の、浦人さわぐ浪路か

く。駿河國清水港の南に松原あり。出せる松原の風。舟の浦曲をこぐ。しむぐ波たつら。集巻七。作者不詳。
 (1)千里好山雲。午斂。一樓明。月雨初晴。見(詩人)玉屑に。
 (2)忘れず。清見が關の波間より。霞みて見えし。三保の浦松。(續)古今集。中務。
 (3)風むかふ雲のうき波たつと見えて。釣つぬさきに。藤原舟人。爲相。

虚空

な。サシ「これは三保の松原に、白龍とまをす漁夫にて候。
 ツレ^(一)「萬里の高山に、雲忽ちに起り、一樓の明月に、雨はじめて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松ばらの、浪たち續く朝霞、月^(二)ものこりの天の原、および無き身のながめにも、心空なる景色かな。歌^(三)忘れめや、山路をわけて清見瀉はるかに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風向ふ雲のうき浪たつと見て、釣せで人やかへるらん。待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな。ワキ詞、われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむる所に、虚空に花ふり、音楽きこえ、靈香^(四)四方に薰ず。これたゞごとと思はぬ所に、これなる松に、

美しき衣かゝれり。よりて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞「なう、其の衣はこなたのにて候。何しにめされ候ぞ。

ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候程に、とりて歸り候よ。シテ

「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物に非ず。もとの如くにおき給へ。ワキ「そも此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ「悲しやな羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんことも叶ふまじ。さりとは返したび給へ。ワキ「此の御詞を聞くよりも、

とやあらん
かくやあらん

天人の五衰
一は頭上天花
二は天衣
三は腋下汗
四は面汗
五は不敬
樂本居

迦陵頻伽

いよ／＼白龍力を得、もとより此の身は心なき、天の羽衣取りかくし、叶ふまじとて立ちのけば、シテ「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ」地にまた住めば下界なり。シテ「とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ」白龍衣を返さねば、シテ「力及ばず、ワキ」せんかたも、地「涙の露の王鬘、かざしの花もしを／＼と、天人の五衰も目の前に見えて、あさましや。

シテ「天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひてゆくへ知らずも。地」住馴れし、空にいつしかゆく雲の、うらやましき景色かな。迦陵頻伽のなれ／＼し、聲今さらにわづかなる、雁が音の歸りゆく、天路をきけばなつかしや。千鳥、鷗の冲つ



事を得たり。此のよろこびにとてもさらば、人間の御遊のか

浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや。

ワキ詞「いかに申候。御姿を見奉

羽れば、餘りに御痛はしく候ほどに、衣を返し申さうずるにて候。

シテ詞「あら嬉しや、こなたへ賜はり候へ。ワキ」しばらく承り及び

たる天人の舞樂、唯今こゝにて奏し給はゞ、衣を返し申すべし。

シテ「嬉しや、さては天上に還らん

たみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとはまづ返し給へ。ワキ「いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさで其のまゝに、天にやあがり給ふべき。」

疑は人間にあり

霓裳羽衣の曲

シテ「いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。ワキ「あら耻づかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨にうるほふ花の袖、ワキ「一曲を奏で、シテ「舞ふとかや。地「東遊の駿河舞、此の時やはじめなるらん。」

いつば

地「それ、久かたのあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りも無ければとて、久かたの空とは

玉斧の修理

君が代は天の羽衣、まれのきて、撫つとも盡きの廢ならん。拾遺集、讀人不知

名附けたり。シテ「サシ」然るに月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣、黒衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ「我も數ある天少女、地「月のかつらの身をわけて、かりに東のするが舞、世に傳へたる曲とかや。クセ「春霞たなびきにけり久かたの月のかつらも花や咲く。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や、天ならで、こゝも妙なり天津風、雲の通路吹きとぢよ。少女の姿しはしとどまりて、此の松原の春の色を三保がさき、月清みがた、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も、松風も、のどかなる浦のありさま。其上、天地は何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ「君が代

〔一〕笙歌遙聞孤雲上。聖衆來迎落日前。
〔二〕北は黄に南は青く東白、西くればなるにそめいろの山。〔紫式部〕
本地

は、天の羽衣稀にきて、地撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへて、かずくの箏、笛、琴、篳篥、孤雲の外に充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山を寫して、緑は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無歸命月天子、本地大勢至。地、東遊の舞の曲、シテ、ワカ、あるひは天つみ空の緑の衣、地、または春立つ霞の衣、シテ、色香も妙なり少女の裳、地、左右左、さいう颯々の花をかざしの天の羽袖なびくもかへすも舞の袖。舞、東遊のかずかずに、其の名も月の色人は、三五夜中のそらにまた、満願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風にたなび

〔一〕愛鷹山。

きたなびく三保の松原、うき島が雲の、あしたか山や、富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。

一八 小 謠

高 砂

四海浪しづかにて、國もをさまる時つ風、枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにやあふぎても、こともおろかやかよる代に、すめる民とて豊なる、君の恵ぞ有難きく。

熊 野

〔一〕四條五條の橋の上、老若男女、貴賤都鄙、いろめく花衣、袖を

〔一〕太平之世。五日一風。十日一雨。風不鳴。雨不破。枝。論衡。王充。

〔二〕京都賀茂川橋に、れる二

つらねて行末の、雲かと思えて八重一重、咲く九重の花盛、名におふ春の景色かなく。

鶴 龜

庭の砂は金銀の、玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の扉、碑礫のゆきげた瑤瑤の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山も餘所ならず、君の恵ぞ有難きく。

鞍馬天狗

^(一)花さかば、告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、くらまの山のうず櫻、手折りしをりをしるべにて、奥も迷はじ咲きつづく木蔭に並みゐて、いざく花をながめん。

竹生島

^(一)花さかばつ
山人といひし
音すなり馬に
くらおけし
(源頼政)

^(一)綠樹影沈魚
上木清波月
落兎奔浪
(建長寺僧自
休竹生島詩)

^(二)御垣守衛士
のたく火の晝夜
は燃えて晝夜
は消えつへ物
(詞花集大中
臣能宣)

^(一)綠樹影しづんで、魚木に上るけしきあり。月海上に浮んで
は、兎も波を走るか、面白の浦のけしきや。

鉢 木

松はもとより常磐にて、薪となるもことわりや。切りくべ
て今ぞ御垣守衛士の焚く火はおためなり。よく寄りてあた
り給へや。

自修文

一九 羽衣の傳説

駿州の三保の松原、空も水も一つ色に澄渡つて、遙かに見やる
富士の高嶺の雪、近くは寄返る荒磯の波と、天地を青と白に染分
けて居る。いづくよりともなく、一片の白雲のやうにひらりとこ
こに下りたつたものがある。照る日に輝く薄衣を松が枝に掛け

て、清い汀みづはに浴したのは天つ少女である。白龍といふ此のわたり
 の漁夫、此の薄衣を松の上に見つけて、携へ歸らうとする。それを
 取られては再び天に上ること叶はず、是非返し給へと歎けば、天
 人の舞樂を奏し給はゞ返し申すべしとて、茲に奏づる霓裳羽衣
 の曲。天つ少女は羽衣を得て、天上へ歸つて行くといふのが謠曲
 「羽衣」の概要である。謠曲の文には佛語ぶつごが加つて居つて、其の文を
 見ると、お寺の欄間らんまなどに彫つてある天女を聯想するが、これは
 我が太古から傳はつた神話である。しかもそれが方々にあつた
 のである。

古い風土ふうど記きの今日に残つて居る文から見ると、近江國と丹後
 國と同じやうな話がある。近江國伊香郡いのか與胡郷よこむら伊香小江いのかせに、八
 人の天つ少女が白い鳥となつて天から下つて、江の南の津に浴
 した。伊香刀美いのかたみといふ男、こは神に相違なからうと覗のぞつて居て、竊
 に白犬をやつて、一人の天女の羽衣を盗ませた。神女之が爲に遂

(一)元明天皇の御代諸國に命じて上進せしめられた地方のこと。
 (二)今の余吾湖のこと。

(一)今、中郡五箇村。

に天上に歸ることが出來ず、伊香刀美の妻となつて、男女各二人の子を産んだ。

もう一つは、丹後國丹波郡たんぱに、比治里ひぢりといふ所がある。此の比治山の頂に眞井まゐといふ井があつたが、或時天女七人こゝに來て浴した。わなさ老夫わなさ、わなさ老婆わなさといふ老人夫婦が之を見て、其の一人の羽衣を取隠した。其の天女は已むことを得ずして老夫婦の子となつて十年程住んだが、其の間によい酒を醸し、一杯飲めば萬病立ちどころに癒いえるといふので、老夫婦の家は忽ちに富み榮えた。然るに恩知らずの老夫婦は、其の後此の天女を追出したので、天女は天に歸ることも出來ず、諸處を流浪したといふ話である。白鳥の下つた話は尙常陸風土記にも見えて居つて、其の話に多少相違はあるが、とにかく、餘程ひろく傳播した話らしく見える。謠曲の「羽衣」は、畢竟其の美しい古傳説を基礎として作つたものである。

(1)Swan.

(2)Swan
Maiden.

(3)Michaie
Ivanovitch.

逍遙

ふらふらある

(4)Finland.
夢枕に立つ
寝て居る者の
枕許に立つて
夢のうちに告
げる。

所が面白いことには、これは決して日本特有のものでは無くして、世界中に弘くひろがつて居る話である。西洋では白鳥即ちスワンが最も美しい上品な鳥と考へられて居るが、天女が此の白鳥となつて浴して居る中、其の羽を取られて歸れなくなるといふ同じ筋の話が澤山ある。よつて傳説學者は之をスワン・メイドン式の説話と名づけて居るのである。所々國々によつて少しづつ違ふが、大體の筋は變らぬのである。瑞典では、若い獵師が三つの白鳥が羽を棄て、海中に浴するのを見付けた。其の中の一つの羽衣を隠して置くと、他の二つと一緒に歸れぬので、遂に其の獵師の妻となつたといふ。露西亞のミハイロ・イワノウィッチといふ男は海邊を逍遙して、水中に浴して居る一羽の白鳥を見た。矢を以て射取らうとすると、やがて美しい女となつて現れた。白鳥ばかりでなく、外の鳥の話になつて居るものもある。極北に近いフィンランド人の話では、死んだ父親が三人の息子の夢枕

に立つて、夜海邊へ行つて雁を見よと告げる。二人は闇夜を恐れに行かなかつたが、一番末の弟は夜中張番をして居る。夜明方に三羽の雁が來て、皆其の羽を脱いで、美しい少女となつて海水に浴した。其の中の最も美しい一人の少女の羽衣を隠して渡さぬので、少女は遂に其の男の妻となつた。雁でなくて家鴨と傳へられて居る所もあるが、又或地方では鳩になつて居るものもある。

地つゞきの亞細亞歐羅巴ばかりでなく、南亞米利加のギヤナにも同じ話がある。アラワックスといふ土人の話に、或時一人の獵師が美しい鳥をつかまへた。これは天上に國を有する王様アヌアニマの娘で、やがて人間の形になつて、其の獵師と結婚したといふ。これには尙長い話がある。エスキモーでは其の鳥が海鳥になつて居る。

ポメラニヤの話に次のやうなのがある。獵夫が森の中をたどつて沼の脇へ出ると、一人の少女が沐浴して居るのを見た。多分

(5)Pomerania.
プロシヤのバ
ルチック海沿
岸地方。

(6)Esquimaux.
北米の北部に
住する未開の
種族。

(7)Annania.

(8)Arvax.

(9)Guinea.

近處の村からでも来たものと考へて、いたづらに其の着物を隠した。少女は水から上つて、是非返してくれといふのを拒絶して、遂に其の少女を妻とした。其の着物は錠をおろして、簞笥の中に入れておいたが、夫の不在中、妻は其の姑に向つて、是非其の着物を見せてくれといふ。姑がそれを出して見せると、忽ちそれを持つて見えなくなつてしまつた。夫は歸宅して妻の行方を尋ねると、これから色々の冒険譚になるのである。

或地方になると、鳥ではなくして獸になつて居るものもある。海豹シロが毛衣を脱いで浴して居る話もある。やはり同様に人の妻となつて子供まで産んだが、子供が何の氣もなく其の毛皮を母に見せると、母は忽ち本の海豹になつて、海に躍り入るなどといふのもある。

白鳥が雁や鳩や、色々な鳥になり、はては獸にまで變つて居るが、其の道筋は全く同じである。これは其の國の風土、動植物の差

五節の舞
昔十一月の中
の丑の日に
行はれる豊明
節は同じ月
行はれる豊明
樂は後世に
み祭は時に
上天皇の御
即位の大嘗
に即ち行は

そもじ

から起つて來るのである。謠曲の「羽衣」には鳥の事はないが、前に挙げた近江風土記や常陸風土記の話も皆白い鳥である。天から少女が下つたといふ話には、天武天皇が吉野の瀧の宮にお出になつて、唯一人琴を弾じていらせられると、雲の中で少女が袖を振つて躍つたのを御覽せられた事がある。これがそもじ、五節ごせつの舞といふものの始であるが、つまり同種類の話である。かういふ世界一般にひろがつた話が太古からあるといふことは、面白いことでは無いか。

二〇 息女への教訓

鳥丸光廣

一筆申し参らせ候。然れば、そもじ幾千代の色もかはらぬ常磐木の枝を連ぬる御祝として、よそへ越し給ふべきこと、誠にめでたう覚え参らせ候。申すまでは候はねども、身持優

信長

しく、心おとなしく、さゞれ石のいはほとなりて苔のむすま
で繁昌して、孫子の末々までも、御榮え候やうにと、打願ひ參
らせ候まゝ、筆に任せて申し參らせ候。

第一、慈悲の心ありて、人を憐み、蟲獸の上までも露の情を
懸け給ひ、おもては唯青柳の絲の風に靡くが如く物やはら
かにして、人の心を酌みしり、僻める心を押直し、御嗜みなさ
るべく候。さて又、心の中は石や金よりも堅く、あだなる心を
持ち給はぬ事肝要にて候。(一)忠臣二君に仕へず、貞女両夫に見
えず。(二)とあれば、此の理を朝夕心に懸け給ひ候はゞ、神や佛の
御守もおはしますべく候。

第二、まれ人など御渡り候はん時、内に無念のこと候とも、

まれ人

あだなる心
(一) 忠臣不事
二君。貞女不
見二夫。
傳 田單

其の氣色を露程も見せず、何となく打向ひ、春は青柳、梅、櫻、鶯、
雲雀、夏は卯の花、菖蒲、橘、杜鵑、螢、秋は月、紅葉、霧、蟲、鹿、冬は雪、霜、
霰、雫、鴨、鷹、いづれも其の折に觸れたる物語などして、懇に取
りはやし給ふべく候。さりとして、年若き人の餘り睦まじげな
るも、外目如何あるべき。唯何となくなぞらへて、とかくしの
ぎなきやうに、愛々しく候はん事こそあらまほしく候へ。

第三、召使ふ人の疎略にて、何事も思ふやうになく候とも、
忍びやかによまひ言をもいひ聞かせ給ふべく候。それをも
聞入れず候はゞ、責め誠めもあるべく候。さりとして、主などの
聞かせ給ふ所にては口惜しく候。如何にみめ姿うるはしき
兒、女房なりとも、腹を立てたる顔は見にくきものにて候。し

よまひ言

かも若き人、聲高に怒り候體、あさましく候。さて、よまひ言をも聽くまじきものと思ひ給はゞ、里へ返し候はゞ、さのみ苦勞もあるまじく候。男も女も、餘り短氣に候うては、難も出來、召使はれ候者も、よそへ悪しきやうに名を立て、後には逃げさるものにて候。

吉野(一)なるなつみの川の川淀に

かもぞ鳴くなる山蔭にして

と詠める歌の心は、吉野の川は早く候、鴨は水の上に住めども、餘り早き所には住み難く、川淀とて、水の淀む所に遊ぶとなり。況や氣性烈しき主に使はるゝは苦しきものに候。

第四、夫婦の間、高きも低きも、睦まじく候はん事こそ、よそ

(一)湯原王の歌。萬葉集卷三及び新古今集に出づ。

の聞えもよろしく、心にくうも待らめ。たとひ幾千代を送り給ふとも、聊かも主に見落されぬやうに、朝夕嗜み候はんに、はいよく、千秋萬歳を保ち給ふべく候。さてまた無念の事をも、さのみ思ふべからず。たゞ世の有様をつらくと見て、心をものどやかに過し給ひ候はゞ、行く末好き事のみにてあるべく候。歌に、

事足らぬ世をな恨みそ鴨の足の

みじかくてこそ浮ぶ瀬もあれ

さて又心に掛けて習ふべきは筆の道にて候。いかなる位高き人中にても、おめずして、しとやかに書きなしたるは、いと氣高く見ゆるものにて候。上にも下つ方にも無手に候は

夕

鳥の跡

ば、不自由なるのみかは、其の身も賤しく成りさがるものにて候。われ人の用に立ちなんものは第一鳥の跡なり。と、或文にも見え候まゝ、常々御稽古あり度候。殊更、和歌は家のものなれば、申すに及ばず候へども、尋常に氣高く、四季に應じて御詠みあるべく候。男も女も、よろづにつけて身持心遣肝要に候。善きが上にも善きやうに願ひ参らせ候。餘り山鳥の尾の長々しく書連ね参らせ候。猶重ねて御祝の數々申し承り候べく候。めでたくかしこ。

二一 野村望東尼

佐々木信綱

望東尼は筑前福岡の人、文化三年浦野勝幸の三女として

(一)光格天皇の御代。三年は紀元二四六六年

時勢日に非

(一)名は忍向。京都清水寺の住僧。安政五年(二五)八月十一日西郡隆盛と俱に海に投じて死す。年四十六。

生る。容うるはしく、歌をよくし、書に巧に、裁縫、刺繡の業にもたけたりしが、同藩の士野村貞貫の詩歌に嗜深く、正義廉直の士なるを聞きて、先妻の子三人あるをも厭はず、野村氏に嫁ぎて、よく其の家を治め、先妻の子をおほし立て、一家和合、春風の吹くが如くならしめぬ。後家を長男に譲りて、平尾村の邊、靜かなる境に世を避けしに、安政の四年といふに、夫世を去りしかば、剃髮して佛の道に入り、其の名もと女を望東尼と改めぬ。當時幕府の專横甚だしく、時勢の日に非なるを見るにつけても堪へがたく、密かに交を志士に結び、あるは其の山莊を會合の所とし、あるは同志をかくまひなどして眞心を盡しぬ。されば、彼の僧(一)月照が薩摩へ下りし時は此處

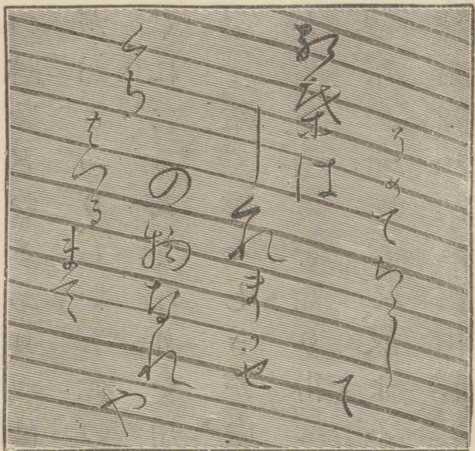
(一)福岡藩士。勤王を唱へて幕吏に捕へられ、元治元年(一八六〇)七月(二五)に刑せらる。或は三十九、或は四十三、或は三十九。
 (二)山口藩士。吉田松陰の弟。子。慶應三年(一八五七)病死。年二十九。
 (三)三條實美。

に宿し、又平野國臣、高杉晋作等をも潜ましめ、其の危きを救ひてねもごろにいたはり、又太宰府に幽閉せられし三條公に謁しなどしたり。かゝる事つもりくしかば、終に罪を得捕はれて浪風荒き玄海灘の一孤島、陸地を距る五里冲なる姫島の牢獄に込められぬ。そこに在ること二年。身を容るべきは、僅かに四疊の荒板敷、めぐりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海見ゆる南の方にのみ小さき窓ある牢の中にかよわき老の身の押込められて、暑さ寒さを忍び居しに、彼の高杉晋作は其の舊誼に報ゆべく、同志を遣りて姫島の牢檻を破り、望東尼を奪ひて長門に隠せしかど、老軀長く堪ふることを得ず、維新の大業成るを見ずして、慶應三年十一月

もみぢ葉は
 時雨まかせ
 の物なれや
 朽ちはつる
 まで染めて
 ちらして

一生の閱歴

経緯



六日、年六十二歳にて、病の爲に空しくなりぬ。女ながらも皇國のおん爲、大君のおん爲に心を碎き、あるは志士の病をとぶらひて慰め勵まし、あるは同志の間に入りて互に志を通ぜしめしなど、其の心づかひなみなみならず、誠に其の一家の良妻賢母なりしが如く、陰に維新の大業を扶けし烈婦の一人なりき。其の一生の閱歴かくの如く、さながら一篇の詩なり。しかも忠誠燃ゆるが如き真心を緯とし、感じ易き優しき女心を經として、優れたる才をもて、

歌文の錦
句々皆血涙
の跡をとむ

なよ竹のた
わみながら
に強きところ
あり

(一)筑前福岡の
人。歌人。文
久年中難波に
出でて歌を教
ふ。
堂奥に達す

此の間に織りなしつる歌文の錦、いかで世の常なるべき。彼が歌は、或は悲憤慷慨、憂國の至情あふれて、句々皆血涙の跡をとむるあり。或は優麗閑雅、やさしき鶯の初聲を聞くが如きあり。しかも此の両面を相むかへ見て、始めて其のすぐれたる人となりを知り、其の歌のまことの趣をも解しつべく、猛く雄々しきが中にも、なよ竹のたわみながらに強きところあるを知り得べし。且や其の歌の調の清新なる、其の觀察の奇警なる、又よみざまの巧にして手のきゝたる、其の修辭に、用語に、自由輕妙にして、其の師大隈言道(一)さながらなるあり。もとより生具の天才ならんも、またよく師を學びて堂奥に達せしものにあらざらんや。以て其の修養の淺から

ざりしを知りぬべし。而して其の歌の慷慨悲憤の一面は、これ彼が境遇性情より得來りし所にして、言道が和歌には見えざる所なり。

—歌學論叢—

二二 女をよめる歌

天照大神

本居宣長

わだの原島の八十神よもの國

ひかりあまねく天てらす神

衣(一)通 姫

香川景樹

ことのはの玉の光もからころも

てりこそとほれ萬世までに

(一)允恭天皇の
妃。和歌に長
じ。和歌の神
の玉津島神社
に祭らる。

(一) 平安朝初期の歌人。六歌仙の一人。備中の歌人。
 (二) 六くさ云々
 (三) 一條天皇の皇后定子に仕ふ。歌をよくし、又枕草子を著す。雪の日の争の事と枕草子に見えたり。
 (四) 歌人。遠江の人。安政六年(二五九)歿。
 (五) 一條天皇の中宮上東門院に仕ふ。源氏物語を著す。
 (六) 國學者。伊勢長門人。本居宣長(一七三二)歿。
 (七) 本書卷二第二五課参照。

小野小町^(一)

小野務^(二)

六くさのみ人の折りつる秋の野の

はなにまじれる女郎花かな

清少納言^(三)

石川依平^(四)

かきつめし雪の日かすの争ひも

きえせで残る筆のあとかな

紫式部^(五)

本居大平^(六)

むらさきの深き根ざしもかきつめし

その卷々に見ゆる言の葉

常磐御前^(七)

本居宣長

しら雪のかゝる憂身のなげきにも

(一) 國學者。舊姓野々口。石見國津和野藩士。明治四年(一八七)歿。
 (二) 明智光秀の第三女。石田三成の兵を擧ぐるや、夫を大坂城に取立てんとす。夫人聽かず。三成人質として自殺す。

こざる花さく春をこそ待て

楠木正行母

大國隆正^(一)

あゝのみのあゝばかりかははゝそばの

あるべき時を子にをしへけり

細川忠興・妻^(二)

小野務

みなふちの細川山ににほふかな

種にはよらぬなでしこの花

二三 色彩

井上哲次郎

色彩は美術上極めて重要な地位を占め、特に繪畫にありては缺くべからざる要素なり。水墨畫若しくは鉛筆畫の

陰鬱

Geoffrey Chaucer. 英國の文學者。西曆一三〇〇—一四〇〇

如く、之を須ひざるものもあれど、繪畫の最大部分は色彩を施せるものなり。此の故に、色彩の性質、關係、結果等を研究するは、畫家の怠るべからざる所なり。其の他、建築、器具、服裝及び百般の裝飾品、一として色彩の調和を要せざるは無し。主要なる色彩の中に於て、赤色と黒色とは正反對にして、赤色は快活の趣を有し、黒色は陰鬱の趣を有す。旭日の始めて昇るや、其の色赤くして金線亂射し、海雲悉く朱に染むが如し。世界萬物夜氣の爲に淨潔となれる後、赫々たる曉光を東天に望む時は、快活の感自らに起るものなり。詩人チョーサーは、東天皆笑ふの句を以て此の曉光を形容せり。これ直ちに快活の感を天地に附して、之を寫象せるなり。桃花若し

西山に春づく 歸雲を燬く

くは杜鵑花の如き、赤色の花相簇りて咲亂るゝ時は、同一の結果を生ぜずといふことなし。晚秋の草木漸く黄ばみ凋む時に當りて、千山の紅葉一時に燃えて天をも焼かんとす。これ一年中最後に得らるゝ快活の感なり。之を一日に比すれば、夕陽西山に春づいて烈火の如く、炎々として歸雲を燬くの狀に同じ。

紅色は赤色より一層愛すべき所あり。淺紅色は猶一層愛すべき所あり。櫻花の爛漫として雲の如きも、淺紅色にあらざりせば、愛すべきもの少かるべし。但し白にして未だ全く白ならず、紅にして未だ全く紅ならず、恰も雪に色あるが如く、僅かに淺紅色を帶ぶる處、愛すべきもの多しとす。雨中又

惹起す

は月夜の櫻花最も愛すべきが如し。紅色に反して、赤黒色は已に赤色の階級を過ぎて、陰鬱の方に近きものなり。人に譬ふれば、赤色は中年の如く、赤黒色は晩年の如く、紅色は青年の如く、淺紅色は幼年の如し。其の間おのづから聯想の存すること、決して否定すべからざるなり。

○ 黒色は赤色に反して、陰鬱の觀念を惹起す。偶、深山幽谷を過ぐるに當りて、日已に没して天漸く暗ければ、おのづから不快の感を生ずべし。其の時煌々たる燈火を得ば、これを頼んで行くべしと雖も、若し不幸にして之を得ず、獨り暗黒の中に彷徨すと假定せば、其の不快果して如何ぞや。これ黒色が陰鬱の觀念を惹起すればなり。黒色は又悲哀の記號とし

彷徨す

て喪服に用ひらる。蓋し悲哀は陰鬱の程度を高めたるものなればなり。黒色は人目を射るが如き鮮明なる色彩にあらざるが故に、眞面目の意味もあり。禮服の黒色なるものあるは、蓋しこれがためなり。要するに、黒色は五色中に於て最も裝飾的効力に乏しきものなれども、他の色彩と反對をなし、それをして愈、顯著ならしむる價值あるが如し。

青色は深遠悠久の趣あり。これ如何なる處より來るか。仰いで天を觀れば、長空蒼々として窮無し。俯して海を觀れば、積水渺々として碧なり。又曠野を眺め、遠山を望めば、草木皆合して一色を成し、眼界皆青し。殊に松葉の翠の如きは、耐久の意味を有す。かくの如く天地間の現象を觀察すれば、おの

長空蒼々
積水渺々

凄氣

づから青色に深遠悠久の趣を附與する傾向を免れざるべきなり。然れども青色は深淺の別あり。淺青は又淺薄未熟の趣を有す。青黄色は衰弱の象にして、頗る凄氣を帯び來る所あるが如し。

淡遠

黄色は思ふに淡遠の趣あるにあらざるか。野外に咲きたる菜花の色の如き、自ら其の趣あり。夕陽黄葉の景に至りては、尙一層其の然るを覺ゆ。荒村籬落の間に山吹の花の咲きたるが如き、世間を離れて別に淡遠の趣を存す。女郎花もしくは黄菊の如き亦然り。黄色に光澤の合一せるは、淡遠といふよりは寧ろ高遠の趣あり。黄金色即ちこれなり。

荒村籬落

白色は清淨潔白の趣あり。梅花の白うして雪の如くなる、

塵俗を超脱す

高士の清節に比するを得べし。古より清廉の士、往々梅花を愛す。蓋し其の性の相似たるものあるが爲なり。雪後雲晴れて、月天心に高く、寒光梅を照す時、最も清淨潔白の感を惹起し、人をして殆ど塵俗を超脱する思あらしむ。又月前の梨花の如き、寒江の蘆花の如き、白雪の如き、皆潔白の意味より外にこれ無かるべし。神道の儀式には、多くは白色の禮服を着く。これまた清淨潔白を尙べばなり。白色光澤を帯ぶれば凄氣を生ず。白眼にして人を睨むが如き、己に十分の凄氣あり。刀劔の露を漑へんとするが如き、月色の白うして氷に似たるが如き、いづれも凄氣を帯びざるは無し。

刀劔露を漑ふ

紫色は快活の深遠にせられたるが如き趣あり。其の他種

花詞

種なる間色にも、それぐ、特殊の意味あるべし。西洋にて各種の花に意味ありとして、所謂花詞を成せるものは、主として色彩にもとづけるならん。然れども、これもと俗習の致す所に過ぎざるが如し。

二四 我が國の繪畫 其の一 藤岡作太郎

理性は想像の銜

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、其の區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、此の兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は尙甚だ顯著なり。音に絹紙と彩具との相違のみならんや。其の用意、筆法等に於てみな然り。彼にあつては藝術は科學に並行し、理性は想像の銜となりて、

腦裏の印象

遠近、明暗つとめて自然に背かざらん事を期し、此にあつては文化の精神的方面獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興に乗じて、腦裏の印象を



大和藥師藏 吉祥天女

瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏すことなく、此は主體の外は生

輪奐

地の儘に存す。一は濃艶、一は瀟洒、一は輪奐なる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛するに

似たり。これらの差別は、蓋し其の初よりして然りしにあら
ず、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今
はた両洋交通の歴史によりて、これを合一せんとする傾向
あるなり。

我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なることは多
言を要せず。眞の美術の歴史といふは、聖德太子の佛教興隆
に始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良時代に及べり。され
ど此の時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれ、
繪畫の歩調は未だこれに伴はず。平安時代に、巨勢金岡を
出してより、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良時
代の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安時代の繪畫も概し

(一)清和天皇よ
り醍醐天皇ま
で五朝に歴仕
せし畫人。

(二)京都の東北
隅、京極土御
門殿の中に御
長建藤原道
長寺建立。法
勝寺は京都市
東三條にあり
三町許にあり
き。

幢幡

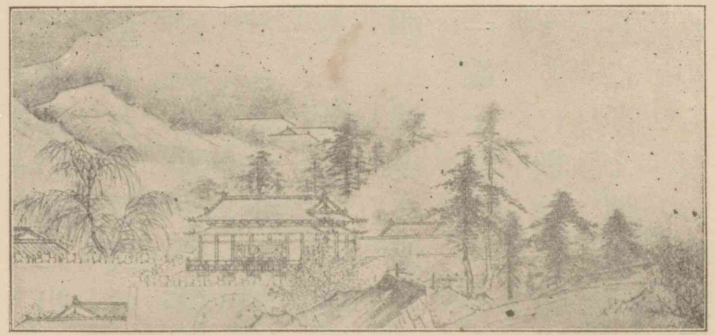
轉經

彩華炫耀

て佛畫の外に出でず。按ふに平安時代のごとく形式美を偏
重したる時代は、他に類例を見ず。佛教もまた形相の具足に
よりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。^(一)法成寺、法勝寺の
ごとき、今廢墟をだに存せずといへども、金堂、講堂、七寶莊嚴
天を摩する大塔、虹を曳く廻廊、すべて一代の工を盡し、狀
態は、歴史の傳ふるところ、今に存する鳳凰堂を見ても、其の
一端を窺ふべし。香煙おもむろに薰じて幢幡を掠め、蓮華し
きりに散つて轉經にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓
月に冴え、頻伽の袖は庭前に翻りて舞容風に堪へず。恰もこ
れ坐らなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身はすでに
汚濁世界を離る。かくのごとき場に用ふる畫像なれば、彩華

丹碧映射
忿怒破邪
微を闡く

(一) 文治元年(一八四五年)頼朝が鎌倉を開き、北條高時(一一九九年)まで百四十年間の時勢を滅亡した。浄土宗の祖師法然上人(一一七三年)が明の天竺僧に贈らせた。光



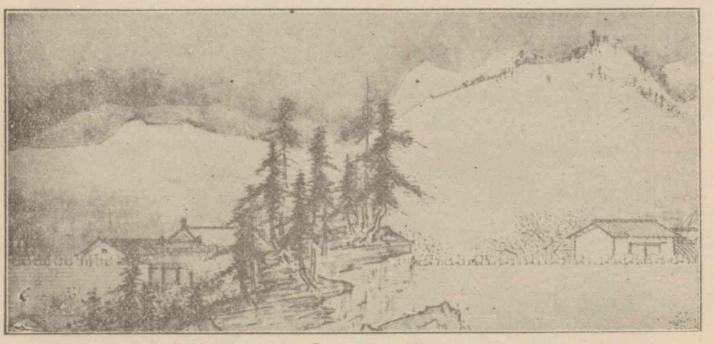
雪舟の舟筆

炫耀、丹碧映射、其の色は珊瑚水晶を碎き、其の線は黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、あくまで鮮に、精を窮め微を闡きて、浮世の乾枯洒脱なるものとは全く選を殊にしたること、想見するに足る。

二五 我が國の繪畫 其の二

(一) 鎌倉時代の繪卷物もまた日本繪畫の精華なり。平治物語の繪卷は源平鬪争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新

(一) 足利義政、寶徳年中、東山に於て、大いに奨励し、其の時、因つて、美術の歴史、東山時代といふ。提擲(二) 備中の名僧にして、寛正六年(一三二六年)歿す。永正三年(一四一三年)歿す。十六七



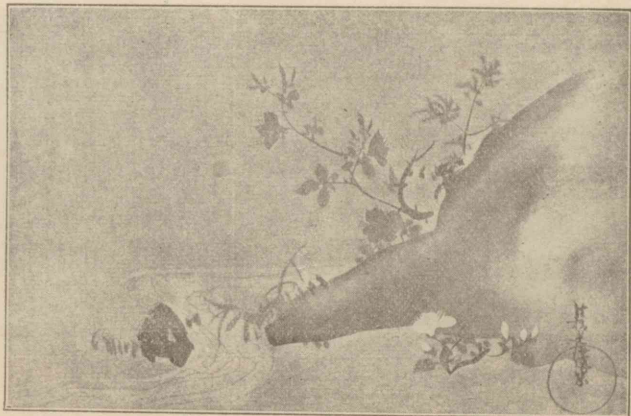
山水繪卷の一部

佛教勃興の機運に従ふ。何れも時代の反映にして、又不朽の逸品たるを失はざれども、内容外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟其の代表者たり。此の革新は禪宗の提擲によりて成り、鎌倉時代に此の宗の傳來せしより漸く養ひ來れる勢力の、こゝに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。抑平安時代の佛寺を去つて禪刹の門を潜るや、彼此別天地の感なくんばあらず。結伽趺坐して寂靜

教外別傳
以心傳心

雲烟萬里

蒼枯にして
恬澹
破墨一掃



(圖 躡 躡) 筆 琳 光

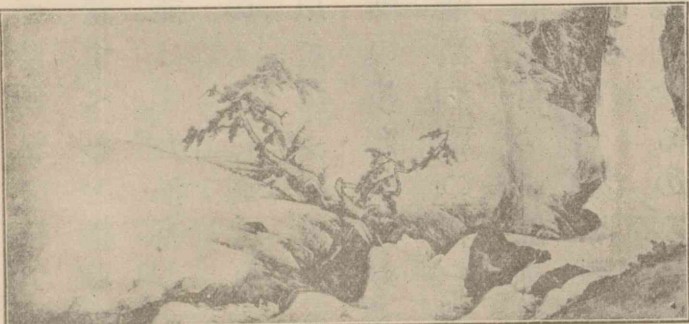
の境に入れば、物の醜美も眼を遮らず。一旦其の道に悟入すれば、經典佛像何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずして、而も能く雲烟萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫も之に同じく、色を棄て、筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を産み、秃筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、

神工

我吾を忘る

流風餘韻

(一) 秀吉が伏見
桃山城にて天
下を治めし時
代。
(二) 狩野派のこ
と。中橋、鍛冶
橋、木挽町、濱
町、何れも分
代、徳川幕府に
仕へき。
(三) 土佐の分派。
徳川時代代々
江戸に住みて々
幕府に仕へ
枯淡
糟粕を嘗む
(四) 東山天皇の
初期。二三三四
三、八、一、三、六
の時代)



(圖 湍 奔) 筆 舉 應 山 圓

熟視すれば神工、益、味はうて益、趣あり、恍惚として我吾を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

(一) 桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫もやゝ移りて雄大穠麗の風を喜べども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて幕府が消極の方針は、更に其の規模を縮めて、枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴きに誇れる狩野、住吉も、先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に

二五 我が國の繪畫 其の二

(一)尾形光琳。享保元年(二二七六)歿。年七十二。
 (二)英一蝶。大阪の人。享保九年(二三八四)歿。年七十三。
 (三)安房の人。土佐派の畫を學びて成功す。正徳四年(二二七四)歿。年七十四。
 (四)本書卷五第五課參照。
 (五)姓は圓山。丹波の人。寛政七年(二四五七)歿。年五十四。
 (六)姓は田中。名古屋の人。土佐派の畫を學び一家をなす。有職故實に明らかなり。
 (七)本書卷七第十三課參照。

傾ける光琳^(一)、滑稽の才ある一蝶^(二)あり。菱川師宣^(三)以來の浮世繪が時勢粧を寫し、山水花鳥以外に題目を求めたるは最も注意すべしと雖も、鄙俗に流れて、遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅^(四)等の文人畫は東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み、形似を疎にし、氣韻生動を以て第一義とする所は即ち相似たり。應舉^(五)等の寫生畫は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、また清淡洒脫の習を脱するを得ず。訥言^(六)が創めたる土佐古風、容齋^(七)が好める歴史畫の如きは、即ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、亦時勢の反響なり。但し此は彼の如き價值なきを憾とするのみ。一派又一派、各盛衰の數を免れざりしが、未だ

其の間斯道の根本に崛起して、的革新に成功せるもの無く、かゝるうちに明治の昭代は來れり。
 東圃遺稿

自修交

二六 我が國の童話

我が國に最も弘く行はるゝ童話は、桃太郎、花咲爺^(一)、かちく山猿蟹合戦、舌切雀等なるべし。童話は祖先以來父母より子に、子より孫に口々に傳承したる國民的説話にして、其の起原を尋ねれば頗る古し。神代史に伊弉諾尊^(二)が黄泉國^(三)よりの歸路、桃の實を投げつけて鬼を防ぎ給ふこと見えたり。又少彦名尊^(四)が粟がらには、じかれて常世^(五)の國に渡り給ふこと見えたり。桃太郎の鬼が島に渡りて鬼退治をなすといふこと、此等神代の説話に本づけるなるべし。因幡の白兔が鰐を欺きて皮を剥がれ、海水に浴して更に苦痛を増し、こと、かちく山に狸が火傷をなし、膏藥を買ひて

傳承
 うけつたへること。

(一)本書卷一第十五課參照。

(二)外國。

更に疼痛を大ならしむると其の趣相似たり。白兔の話にては兎悪者なるに、かちく山にては兎却つて手柄者となれり。然れども兎が幾度か狸を欺き、遂にこれを土舟に溺れしむるまで、其の狡狴なる性質の残りたるもをかし。

童話は口々に傳承せられたるを以て、時代によりて多少の變化をなし、時代的特徴を帯び來る。桃太郎の鬼が島征伐は、其の起因神代の説話の本づくが如くなれども、其の現形を成せるは、足利時代にはあらかと思ふ。所謂八幡船に乗りて、朝鮮支那の近海に押寄せたる倭寇の侵掠は、桃太郎の遠征談を形成せしめしならんと思はる。かちく山の土舟木舟の詭計といひ、猿蟹合戦の復讐戦といひ、總じて今日まで遺れる童話は、戰國時代の面影を傳ふるもの多し。花咲爺は花の國、櫻の國たる日本の童話として最も相應しく、極めて平和的なれども、それすら人悪き爺は殿様に縛られ、或は殺さるといふこと、尙封建時代の臭味を帶ぶ。足

(一)足利時代に八幡大菩薩と書いた旗を立てて、支那に乗り寄せて、朝鮮の近海に押寄せた。支那人は此の船を八幡船といつて恐れた。 (二)支那で以上の事をさして詭計といつた稱。 (三)はりのはかりこと。 臭味にほひ。

酷似
ひどく似て居ること。

(一)藤原不比等が元正天皇より追贈せられたりし號。 (二)岩代國信夫郡信夫卿の庄。

利時代には之に似たる説話ありて、花咲爺は之より出てたるが如し。竹藪の中に雀の宿を尋ねたる舌切雀は、腰折雀といひて酷似したる話、鎌倉時代に出來たる宇治拾遺物語に出でり。童話は時代の性質をあらはすのみならず、其の中亦自ら國民の性情を發露す。外國の童話は我のに比して峻烈慘酷なる筋の話多し。

二七 義經記——主従の別

十六人思ひくゝに落ちかゝる所に、音に聞えたる剛の者あり。先祖を詳しく尋ぬるに、鎌足の大將の御末、淡海公の後胤、佐藤のりたかが孫、信夫の佐藤庄司が二男、四郎兵衛藤原の忠信といふ侍なり。人も多く候に、御前に進み出でて、雪の

(一)能登守平教經。

(二)文治二年(一八四六)

(三)藤原秀衡。陸奥出羽の押領使基衡の子。嘉應二年鎮守府將軍となす。頼みて成る。頼みて成る。頼みて成る。

(四)高倉天皇の御代。二年は紀元一八三八

年。紀元一八三八

上に跪きて申しけるは、君は御心安く落ちさせ給へ。忠信はこれに止まり候うて、麓の大衆を待ちえて、一方の防矢仕り、一まづ落し参らせ候はゞや。」と申しければ、尤も志は嬉しけれども、御邊の兄繼信は、屋島の軍の時義經が爲に命を捨て、能登殿の矢先に中りて亡せしかども、これまで御邊のつき給ひたれば、繼信も兄弟ながらいまだ有る心地こそしつれ。年の内は思へばいく程も無し。人も命あり、我も長らへたらば、^(二)明年の睦月の末、二月初には陸奥へ下らんずれば、御邊も下りて秀衡をも見よかし。又信夫の里にとゞめ置きし妻子をも、今一度見候へかし。」と仰せられければ、さ承り候ひぬ。^(四)治承二年の秋の比、陸奥を罷り出で候ひし時も、今日よりして

今日は人の上、明日は我が身の上

綸言

君に命を奉りて、名を後代にあげよ。矢にも中り死しけると聞かば、孝養は秀衡が忠を致すべし。高名度々に及ばず、勳功は君の御計らひとこそ申し含められしか。命を生きて故郷へ歸れと申したることも候はず。信夫にとゞめ候ひし母一人候も、其の時を最後とばかりこそ申しきりて候ひしか。弓箭とる身の習、今日は人の上、明日は我が身の上、皆かくこそ候はめ。君こそ御心弱く渡らせ給ひ候とも、人々それよき様に申させ給ひ候へや。」とぞ申しける。武藏坊これを聞きて申しけるは、弓矢取る者のことばは綸言におなじ。言葉に出しつることを、ひるがへす事は候はじ。只心やすく御暇を賜はりたし。」とぞ申しける。判官暫く物をも仰せられざりけるが、

玄冬素雪
九夏三伏

(一)桓武天皇の朝の武將。弘仁二年(一〇一一年)歿。五十四歳。
(二)醍醐天皇時代の武將。下野高座山の賊を討ち功あり。

稍ありて、惜しむとも叶ふまじ。さらば心にまかせよ。」とぞ仰せられける。忠信承りて嬉しく思ひて、たゞ一人吉野の奥にぞとどまりける。されば夕には月星の光をいたゞき、朝には教訓の霧をはらひ、玄冬素雪の冬の夜も、九夏三伏の夏のあしたにも、日夜朝暮片時もはなれ奉らず仕へ奉りし御主の御名残も今ばかりなりければ、日比は坂上(一)の田村麿、藤原(二)の利仁にも劣らじと思ひしが、さすがに今は心細くぞ思ひける。十六人の人々も、面々に暇乞して、前後不覺になりけり。又判官、忠信を近く召して、太刀と鎧とを賜ひ、故郷に思ひおく事は無きか。」と仰せられければ、我も人も衆生界の習にて、などか故郷の事を思はざらん。國を出でし時、三歳になり候

(一)同國伊達郡に嫁したる

を一人とどめ置きて候ひしぞ。彼の者に心付きて、父は何處にやらんと尋ね候べきなれば、聞かまほしく候。平泉出でし時、君ははや御立ち候ひしかば、鳥の啼きて通るやうに、信夫を打通り候ひしに、母の所に立寄り、暇ごひ候ひしかば、齡衰へて、二人の子供の袖にすがりて、悲しみ候ひし事、今の様に覺え候。『老の末になりて我ばかり物を思ふ、子供に縁の無き身なりけり。信夫の庄司に過ぎわかれ、またく近付きて不便にあたられし伊達(一)の娘にも過ぎわかれ、一方ならぬ歎なれども、わ殿原を成人せさせて、一所にこそなけれども、國の内(一)にありと思へば、頼もしくこそ思ひつるに、秀衡何と思し召し候やらん、二人の子供を皆御供せさせ給へば、一旦の恨

血をあへす

はさる事なれども、子供を成人せさせて、人數に思はれ奉るこそ嬉しけれ。隙なく合戦にあふとも、臆病のふるまひして、父の屍に血をあへし給ふなよ。高名して、四國西國の果におはすとも、一年二年に、一度も命のあらん程は下りて見もし見えられよ。一人留まりて一人たえたるだに悲しきに、二人ながら遙々と別れては如何せん。』とて、聲も惜しまず泣き候ひしを振捨て、』さ承り候。』とばかり申して、打出で候より此の方、三四年終におとづれも仕らず。去年の春の比わざと人を下して、』繼信討たれ候ひぬ。』と告げて候ひしかば、身も絶えなんと悲しみ候ひけるが、』繼信が事はさて力及ばず、明年春の頃にもなりなば、忠信が下らんといふ嬉しさよ。はや今年

〔嘉永三年のこと。〕

の月日も過ぎよかし。』などと待ち候なるに、君の御下り候はば、母にてさぶらふ者急ぎ平泉へ参り、』忠信はいづくに候ぞ。』と申さば、繼信は屋島、忠信は吉野にて討たれけると承りて、いかばかり歎き候はんずらん。それこそ罪深く覚えて候へ。君の御下り候うて、御心安くわたらせおはしまし候はゞ、繼信、忠信が孝養は候はずとも、母一人不便の仰にこそ預り度候へ。』と申しも果てず、袖を顔に押當て、泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も、皆鎧の袖をぞ濡しける。

二八 俳句の感興

發句は形短けれど、餘情ありて玩味すべきもの多かり。

靈供

早少女や泣く子の方へ植ゑて行く
わかれても闇に見にくる幟かな

此の句どもを吟ずれば、親の子を思ふ情思ひやらる。

遠江國天龍川の邊に老いたる賤の男、孫を失ひて其の翌
年の七月孟蘭盆といふに、彼の孫が位牌に靈供を供ふとて、
去年まで叱つた瓜を手向かな

此の句を吟ずれば、恩愛の情、涙も落つるばかりなり。

其角は、

夕立や田をみめぐりの神ならば

にて雨をふらし、不角は

頼政がひろひ残ししひもがな

(一) 姓は立羽。江
戸の俳人。寶
曆三年(二四
一三)歿。年六
十二。

(一) 連の名家。
紀伊の人。文
徳二年(一一
六二)函根湯
本に歿。年八
十二。
あらけなく

にて位にすゝめり。其の道の蘊奥に至りては、歌も、句も人情
を和ぐるところ格別の相違あるべからず。

去りし年、總州邊にて俳諧を好む獨者の方へ盜賊入りて、
器財悉く盜み取れり。彼の俳人を手厳しく柱にくゝり附け
て、ちつとも動かせず。俳人のいふやう、我少しの望あり。今か
くの有様になれば、金錢財寶一つとして惜しからず。しかし
一つの願あり、笈の中に入置きたる宗祇自筆の伊勢物語と、
床の間に置きたる末の松山の文臺とをば我に與へ給へ。」と
いひければ、賊魁聞届けて、さもあらけなく取出して投げや
り、俳人の繩目をゆるして、盜賊どもは出行きけるが、さるに
ても、只今彼が乞ひたる書物と文臺とは結構なるものにや、

立歸りて奪ひ取らんとて、戶外に佇みて内の様子を伺ひけるに、倂人は屈する色も無く、燈かきたて、筆と紙とを手を持ちながら、

ぬす人もあととざし行く夜寒かな

と繰返し、獨り吟じあけるに、盜賊等此の句にめでたいに感じ、今宵奪ひ取りたる道具どもを悉く返し與へ、かゝる無欲なる面白き人とは知らず狼藉したりとて、金を多く與へけるを敢へて取ることもなかりしが、四五日も立ちて、いづくよりもなく、樽肴に熨斗包添へて、竈の前に置きて歸りけり。察するところ彼の盜賊等の業なるべし。

實に其の道に至りては、鬼神をも感ぜしめ、猛き武士の心

狼藉す

(一)古今和歌集の序。力をも地の動かし、天目に見えぬ鬼神はあはれぬと思はせむ。男女との中を猛き武士の心も感ずるは歌なり云

をも慰め、男女の中をも和ぐ。僅かの一端とはいひながら、其の感應深く思ふべし。

—雨窓閑話—

二九 名 數

三種神器、三大節は國民として知らぬもの無かるべし。女子三從の道は儒教の説ける所にして、我が國にても古くより三つの従ふ道といへり。三后は太皇太后、皇太后、皇后、三公は太政大臣、左大臣、右大臣なり。四天王の名は佛教守護の神持國、增長、廣目、多聞より出で、源賴光の家來に渡邊綱、阪田金時、碓井貞光、卜部季武の四天王あり。武將の四天王は其の他にも多し。徳川時代、京都和歌の四天王と呼ばれたるは伴蒿

(一)國學者。近江の人。文化三年(二四六六)歿。年七十四。

〇 歌僧、備中或
 備後ともい
 ふ。の。寛政
 十一年(二四
 五九)歿。年八
 十五。
 (一) 俗姓は塚田。
 信濃善光寺の
 人。文化二年
 (二四五六)
 歿。
 (二) 正月七日、三
 月三日、五月
 五日、七月七
 日、九月九日。
 (三) 桓武天皇の
 裔といふ。傳
 詳ならず。
 (四) 近江の人。貞
 觀頃の人。
 (五) 字は文琳。清
 和に仕ふ。天
 皇に仕ふ。寛
 貞。仁明天皇
 (七) 俗名長峰宗
 貞。仁明天皇
 二年(一五五
 〇)歿。

蹊、小澤蘆庵、澄月、慈延なりき。源、平、藤、橘を四姓といへるは、最
 も榮えたる氏族をいへるなり。士、農、工、商を四民といひて、古
 は士を四民の第一とせしが、今は平等にして、いづれも納税、
 兵役の二大義務を負ひて、我等自ら我が國を護るなり。木、火、
 土、金、水を五行といへるは、精密なる現今の科學に照しては
 價値なし。一年五節供こそ往古の風俗もしのばれてゆかし
 きものなれ。六歌仙は喜撰法師、大友黑主、在原業平、文屋康秀、
 僧正遍昭、小野小町の六人にて、六人の中一人の女流あり。大
 友黑主を除きては、其の歌みな百人一首に採られたり。六玉
 川とて和歌の名所に歌はれたるは、山城、攝津、近江、紀伊、武藏、
 陸奥の六箇所にあり。

(一) 平沙落雁。遠
 浦歸帆。山市
 晴嵐。江天暮
 雪。洞庭秋月。
 瀟湘夜雨。漁
 村夕陽。漁村
 寺晚鐘。漁村
 夕陽。漁村
 (二) 支那唐代宋
 代に於ける八
 名家の文を選
 輯せし書物。



六
 笠
 歌翁
 仙

七月七日の七夕は五節供の一。七
 福神と七草とは諸子己に之を學べ
 り。近江八景を始として勝地に八景
 を立つること各所にあり。もと支那
 (一) 洞庭湖の八景に倣へるなり。何々八
 笠
 景といふ文、淨瑠璃には頗る多し。唐
 (二) 宋八家文は漢文にしてむづかしけ
 れど、里見八犬傳は徳川時代の小説
 にして、何人にも讀み易し。我が國の
 女帝は九代を數へ奉る。推古、皇極、齊
 明、持統、元明、元正、孝謙、稱徳、明正これ
 一〇八

(一)陽明、待賢、
郁芳、美備、朱
雀、皇嘉、談
天、藻壁、殷
富、安嘉、殿
鑿、達智、十
二門、侍

なり。甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸の十干、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十二支は古くより年紀を數ふるものにして、今尙用ひらる。宮城の十二門、和歌の二十一代集と三十六歌仙、赤穂の四十七士、源氏物語の五十四帖等、數限りもなく多し。

三〇 曉の誕生

島崎藤村

東の空のほのぐくと、
この曉のさまを見て、
汝が世は白みそめにけり、
運命をいかに占はん。

ことにさやけき紅の
やがて處女となるまでの
ひかりを放つ明星や、
汝が生先のしるべせよ。

黎明

朝風舞をまふごとく、
鶏は眼覺に驚きて、
遙かに雲の袖を吹き、
まづ黎明を呼びにけり。

始めて朝の床の上に、
蕾を破るあけぼのよ、
汝が初聲を聞く時は、
蓮の花にまがふかな。

ぬるき潮に浴して、
まだ罪もなき姿こそ、
朝日ににほふ茜染、
なかばは夢の風情なれ。

いかにいかなる世なりとは、
思ふ心もなからまし。

そのうるはしき眼もて、 なにをか見んと願ふらん。

まだ生れ來し世の中に、 願ふもとめもなからまし。

空に優しき手をのべて、 なにをか早も慕ふらん。

行く末花と生ひたちて、 いかなる夢を重ぬとも、

かゝるゆたけき朝のごと、 心の空のしづかなれ。

—藤村詩集—

(一)あらたまの
年立返る朝よ
り、またるい
ものは驚のこ
る。市道集、
素性法師
心づから

三一 春の樂み 其の一 貝原益軒

春はまづ一夜の程に、(一)あらたまの年立返る朝の空の光、心

四つの始

はだれ

づからにや、舊年に變りて長閑けし。睦月はことだつとて、貧
しき家にも春盤などいふものを設く。又土器取出で、大御酒
進めて、まづつとめて父母に壽し、次に自ら祝し、賓客にもも
てなす様など常に變りて、いとなんいみじうめづらかなる。
時は今四つの始なれば、空の氣色やうくひきかへ、こち風
ゆるく吹きて氷解け、遠き山に霞の薄くたな引ける、様々に
物けざやかに見えて、冬の空に立變れる装、まづ春の來れる
しるしあらはなり。垣根隠れに、冬より残れる雪の所々はだ
れに見ゆるも、去年の名残を惜しむべし。待ちわびし梅の匂
百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷
る鶯の、春を迎へても、若き聲、初春の初音のけふに逢へる、

(一)花ならで身にしむものは驚の、薫らぬこゑのほひなりけり(風雅集、道因法師)

(二)清少納言。

(三)日の光敷し上(わ、ふりこし)里(けり)に花(古、今)咲(き)集(布留、今道)

日永くして少年の如し

耳とまりて戀しく、花ならで身にしむものならし。
如月の程より、よろづ皆冬の心盡きて、空の色麗かに氣色だちて、四方山も霞こめたる装、殊に曙の景色譬ふべきものなくあはれむべし。古の人、春は曙。といひけんも宜なるかな。日の光敷し分かねば、數ならぬ垣根のうちも、冬にかはりて輝き出で、草木生ひて皆顔色を生じ、花待ち顔になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になりもて行けば、人の業も舊年より暇ありて忙しからず。日永くして少年の如く、心靜かにゆたけし。海の面日和よく、浦山も麗かに霞み渡りたる景色、いと遙けし。夕つげて日は既に入りぬれど、残れる日影尙久しきは、日の永きしるしなるべし。

けおさる

(一)續古今集、藤原爲家。

うしろめたし

櫻の綻び出でたるこそ、花に心は無けれど、人の心を動かしてえならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも第一の見物なれば、梅散りて後、此の頃の異花は皆けおされぬ。されど日比待たせく、てやうやう咲けるが、飽くまで見る程もなく疾く散るは又恨めし。

(一)よしさらば散るまでは見じ山櫻

花のさかりを面かげにして

と古の人の詠みけんも、後の思出にせんとにや、情深し。此の折から春雨のしく、降れば、我が宿の園の櫻はいかにかあるらんとうしろめたし。柳翠に、花紅にして、春の色を畫がき出せるは、いと麗しき眺なり。

三二 春の樂み 其の二

春やうやく深くなれば、風やはらかに日暖に、百草芳を争ひ、群花艷を競ふ折なれば、何れの處か春の無からん。かゝる景色に觸れては、人の心も浮立ちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあくがれ歩き、ひねもす花を眺め暮すこそ、目も恣にし、心を快くする業なれ。世の中のいみじく嬉しき事のあらが中なる其の一つなるべし。

花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞすなる。花に坐し、月に酔ひて、二つながら兼ねたる樂み、春宵一刻直千金。花有清香、月有蔭。といふ詩を思ひ出でられぬ。又惜花朝起早。愛月夜眠遲。といへり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人の

かいつらね

(一) 歌管樓臺人寂
寂。沈沈院落
夜沈沈。蘇東坡
(二) 林希逸の一句

(一) あたら夜の月と花とを同じくば、心しれらん。人に見せばや。後撰集。源信明撰。朝まだき起きてぞ見つる梅の花。夜の間の風のうしろめたさに。拾遺集。元長親王。
(二) 周弼の詩句。
(三) 白居易の詩句。
(四) 謝靈運の夢中に得たりといふ詩句。
(五) 山城國綾喜郡。山吹の名所。
(六) 巨勢山のつらつら樺のつららに見れどもあり。巨勢の春野を。萬葉集。阪門人足。

あたら夜の月と花とに背きて空しく臥すはいと惜しむべし。又夜の間の風のうしろめたきをも知らず、朝起くること遅きは花を惜しまざるなり。此の頃夕暮は遠き山邊の焼けぬるも、目立つべき見物なり。されば春風入燒痕。といひ、又野火燒不盡。春風吹又生。といへるも、燒野の草を詠ぜしなり。古詩に「池塘生春草」といへりしは、此の頃の眼前の景色を唯ありのまゝにいへるなるべし。

彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に翻るは、井手の渡も見る心地して賑はしければ、めかれせずながめがちなり。春の花の多かる中に、たゞ山茶のみ異花に變りてさかり久し。殊更つらをなして植ゑたるつらく、椿、つらくに見れども

いとましく

(一)惜しめども春の限りの今日もまた夕暮にさへなりけるなり(後撰集、讀人不知)
(二)宋の文豪蘇軾、號は東坡、子瞻は其の字、徽宗の初年(一七六)初歿。年六十六。

飽かず。階のもとまの薔薇ばいばいも夏を待ち顔なり。

すべて春は草木の花先立ち後れて、次々にいとましく、遅く疾く咲續つづき、酴醾とらみに至りて花のこと終りぬるは、名残惜しと見ゆ。春の花はいづれとなく、咲出づる色毎に目驚かれぬるに、心短くて早く散りぬるは怨めし。九十の春光はいと長けれど、何くれと紛らはしく、風雨も亦繁ければ、爲す事なくはかなく過ぎて、とどめあへぬ春(一)の限りのけふの日の暮にさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は名残いと惜しむべし。
蘇子瞻が「青雲還一夢」といへる、宜なるかな。 — 樂訓 —

三三 當今の憂

徳富蘇峰

自力主義
我自ら我を
恃む

歩趨を一に
す

日本帝國の運命は、唯日本國民の自力に據りて支持せられ、繼續せられ、開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃たむの外に、方便も手段もあらざればなり。即ち千百の方便手段ありとするも、そは自力主義踐行の後に於て、始めて其の効用を見るべければなり。

然りと雖も、吾人が所謂自力主義は決して自滿主義にあらず。自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや。排外主義をや。吾人は我が短を補ふべく、世界のすべての長を採らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と歩趨を一にせざるべからず。然も是たゞ内に自ら主持する所ありて、而して後外に向つて之を求むべきのみ。

協調

吾人は我が國民が精神的に獨立し、而して後世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞや。日本國民は日本國民として、其の獨特の立脚地に於て、内外一切の經綸を定むること、是なり。東洋の獨逸にあらず、東洋の英米にあらず、日本は即ち東洋の日本としてなり。日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自ら我が國民的見地に據りて、其の裁斷を下すにあるのみ。此の如く内既に主持する所あり、乃ち外に向つて其の益を求む。必ずしも英米といはず、必ずしも獨佛といはず、世界の長は皆採つて以て我が有と爲すべし。復何をか顧慮し、何をか遲疑せん。惟ふに我が國當今の憂は、第一、國民の惰氣滿々たるにあ

惰氣滿々

小成に安んず

磨勵自彊

り。別言すれば、國民猛志を消磨し、小成に安んずるにあり。曰く、日本は既に五大國の一に位せり。曰く、日本は既に東洋の盟主たり。曰く、日本は既に富強なりと。而して更に磨勵、自彊、此の國運を進一轉せしむるを閑却しつゝあるなり。第二は、世界の大勢を根本的に謬解せるにあり。曰く、世界は泰平なり、今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし。國際的の葛藤は國際聯盟の爲に自動的に安排せらるべしと。彼等は待つあるを待まず。其の來るなきを待み、其の待むべきを待まず、待むべからざるを待むなり。吾人は今其の妄想たることを説破するまでもなく、茲に英國現在の參謀總長ウイルソン元帥の言を引證すべし。曰く「吾人が大戰最中に於て屢、耳にし

たる『今次の戦争は、爾後の戦禍を杜絶するの戦争なり。將來は只平和あるのみ。』との言は、畢竟人を瞞着したる妄言にてありき。看よ、現在に於ても、世界の各所に二十乃至三十の戦争行はれつゝあるにあらざや。果して然らば、吾人は今後の戦争に向つて、大いに準備する所なかるべからず。我が帝國の前途は實に危殆なり、不安心なり。』と。是英人に與へたる訓戒なれども、採つて以て我が訓戒となすに足らざらんや。第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも、寧ろ世界の多くのものより排斥せられつゝあるなり。是必ずしも日本國民の罪とのみいふべからず。而も其の原因は何所にあるにせよ、事實は正しく此の如し。而して我が國民は、

闡明す

苟安を偷取す

此の如き不愉快なる事實を正視し、識認し、之に處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。第四、我が國民は物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことを勗めず。進んで世界に向つて自國の真相を闡明し、世界の誤解を正すことを努めず、唯其の日暮しに一時の苟安を偷取しつゝあるは何ぞや。第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。如何に世界の迫害を被るとも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、何をか懼れ、何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるにあらずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。蓋し吾人が自力主義といふものは、内に國民の道義的自

角逐す

眼前を糊塗す

信力を扶植し、まづ自ら不敗の地を占め、而して後徐に外に向つて我が志を行ふにあるのみ。此の如くして世界と協調を保つべく、此の如くして東洋の盟主たるべく、此の如くしてアングロ・サクソン民族と角逐して、世界の文化に貢献し、我が大和民族の天職を全うするを得べきのみ。今日の如く、我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら頼まずして他を頼み、放恣、怠慢、強ひて自ら欺きて眼前を糊塗し去らんとす。此の如くして止むなくんば、我が帝國は精神的に死亡するなり。

— 大戦後の世界と日本 —

改訂女子國文卷八終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。本)

劍	剪	乃	函	減	涼	準	况	決	冒	免	免	佞	佻	兩	通用正		
劍	剪	刀	函	減	涼	準	况	決	冒	免	免	佞	佻	兩	通用正		
冤	墻	塚	塲	噴	噐	唇	叙	収	廐	厨	卿	鄉	即	効	通用正		
冤	墻	塚	塲	噴	噐	唇	叙	収	廐	厨	卿	鄉	即	効	通用正		
拔	拿	戲	懺	懺	懺	恒	徃	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用正		
拔	拿	戲	懺	懺	懺	恒	徃	廩	屏	并	帽	剋	寶	寇	通用正		
濱	温	氷	藏	欸	概	桿	晋	昂	整	攬	攬	攬	攬	插	通用正		
濱	温	氷	藏	欸	概	杆	晋	昂	既	整	攬	攬	攬	插	通用正		
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	貓	猪	猿	熔	陰	潛	濶	通用正		
杯	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	貓	猪	猿	鎔	陰	潛	闊	通用正		
續	續	紀	穀	粘	籤	纂	節	竽	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正		
續	續	紀	穀	黏	籤	纂	節	竊	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正		
厠	勅	冲	倅	俟	京	亡	並	万	聿	耻	羹	群	罰	纏	織	通用正	
厠	敕	冲	倅	埃	京	亾	並	萬	聿	恥	羹	羣	罰	纏	織	通用正	
婚	姉	妍	妊	野	坂	囁	叶	厮	同	艷	館	鋪	阜	致	腸	脈	通用正
婚	姉	妍	妊	埜	阪	囁	協	厮	同	艷	館	鋪	阜	致	腸	脈	通用正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	解	霸	褒	衛	蔭	蒨	莽	通用正	
攷	慙	富	忘	菴	島	峰	岷	嶽	解	霸	褒	衛	蔭	蒨	莽	通用正	
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	賈	贊	賓	象	讎	讖	記	通用正	
槩	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	賈	贊	賓	象	讎	讖	記	通用正	
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	毘	朴	隸	隙	間	鎖	隣	輒	軟	通用正	
砧	覩	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸	隸	隙	間	鎖	鄰	輒	軟	通用正	
緜	總	網	紆	紉	粽	筍	競	稿								通用正	
緜	總	網	紆	紉	糉	筍	競	藁								通用正	

附錄

羈羈 花華 衽衽 谿 遁 遜 雁 鴈
 船 荒荒 訛譌 踪 蹤 銚 矛 雞 鷓
 艫 蝨 譁 嘩 躑 躑 鏤 鏤 駟 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中
 *標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從
 ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。慣用ニ從
 中
 羅タル。「連互」
 桓ニ同シ。
 笨ニ同シ。アラシ、竈、粗。
 カラダ。
 タマシ、タマ。「但馬」
 ツタナシ、拙劣。
 ミダリガハシ、猥。
 身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
 カブト、兜。「甲冑」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

胃 胃 僭 僭 但 但 體 體 巨 互

拓ニ同シ。オス、ヒラク。
 ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
 ハラフ。又アゲ。
 ニナフ、カツグ。
 鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
 アラタム。
 ヤリ。
 鏘ニ同シ。鐘ノ聲ノ形容。
 アクビ。「欠伸」
 カク。「缺席」
 ホソイト、細紙。
 イト。
 支那ノ地名。
 ウラヤム。

托 託 担 担 改 改 鎗 鎗 欠 欠 糸 糸 羨 羨

魚介類の總稱。又マムシ。
 △シ。
 ワビ、ワブ。「酪狀」
 訛ニ同シ。アザムク。
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 禮ノ古字。
 エタカ。
 マデ。
 エリ、行。
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

協 協 刺 刺 臺 臺 后 后 商 商 壺 壺 姫 姫

カナフ、叶。
 カビヤカス、脅。
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「白臈。白臈」
 ウテナ、ダイ。
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、ガクル。
 キミ。「皇后」
 アキナヒ。
 モト、本。
 ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 ツ、シム。
 ヒメ。

^{グキ} 卻 ^{ロ、隣}
^{キタフ} 鍛 ^{シリツク。}「退卻」
^{シコロ、}「鍛」
^{シコロ、}「鍛」

宛字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
 かひ (證の意) 甲斐
 きつと 屹度
 さすが 流石、遺
 しまふ 仕舞ふ
 せつかく 折角
 だめ 丈
 ちやうど 駄目
 ちよつと 一寸、鳥渡

出鱈目
 到頭
 兎角、左右
 迎
 兎に角
 中々、却々
 振舞
 果敢なし
 本當
 無駄
 六ヶし
 矢鱈
 矢張

附 録 終

東京市神田區通神保町九番地

大正六年 十月二十七日 印刷
 大正七年 十一月十六日 印刷
 大正八年 十二月十八日 印刷
 大正九年 一月廿二日 印刷
 大正十年 二月廿六日 印刷
 大正十一年 三月廿三日 印刷
 大正十二年 四月廿六日 印刷
 大正十三年 五月廿三日 印刷
 大正十四年 六月廿三日 印刷
 大正十五年 七月廿三日 印刷
 大正十六年 八月廿三日 印刷
 大正十七年 九月廿三日 印刷
 大正十八年 十月廿三日 印刷
 大正十九年 十一月廿三日 印刷
 大正二十年 十二月廿三日 印刷

改訂女子國文典附

定 價
卷一 卷四、各金四拾錢
卷五 卷七、各金參拾八錢
卷六 卷八、各金參拾七錢
卷九 卷十、各金四拾錢

大正十四年度臨時定價

定 價
卷一 卷四、各金七拾貳錢
卷五 卷七、各金六十八錢
卷六 卷八、各金六十七錢
卷九 卷十、各金七十貳錢

編 者 芳 賀 矢 一

發行兼印刷者 東京市神田區通神保町九番地 富 山 房

代表者 合資會社富山房社長 坂 本 嘉 治 馬

印刷所 東京市小石川區音羽町七丁目六番地 博 信 堂 印 刷 所



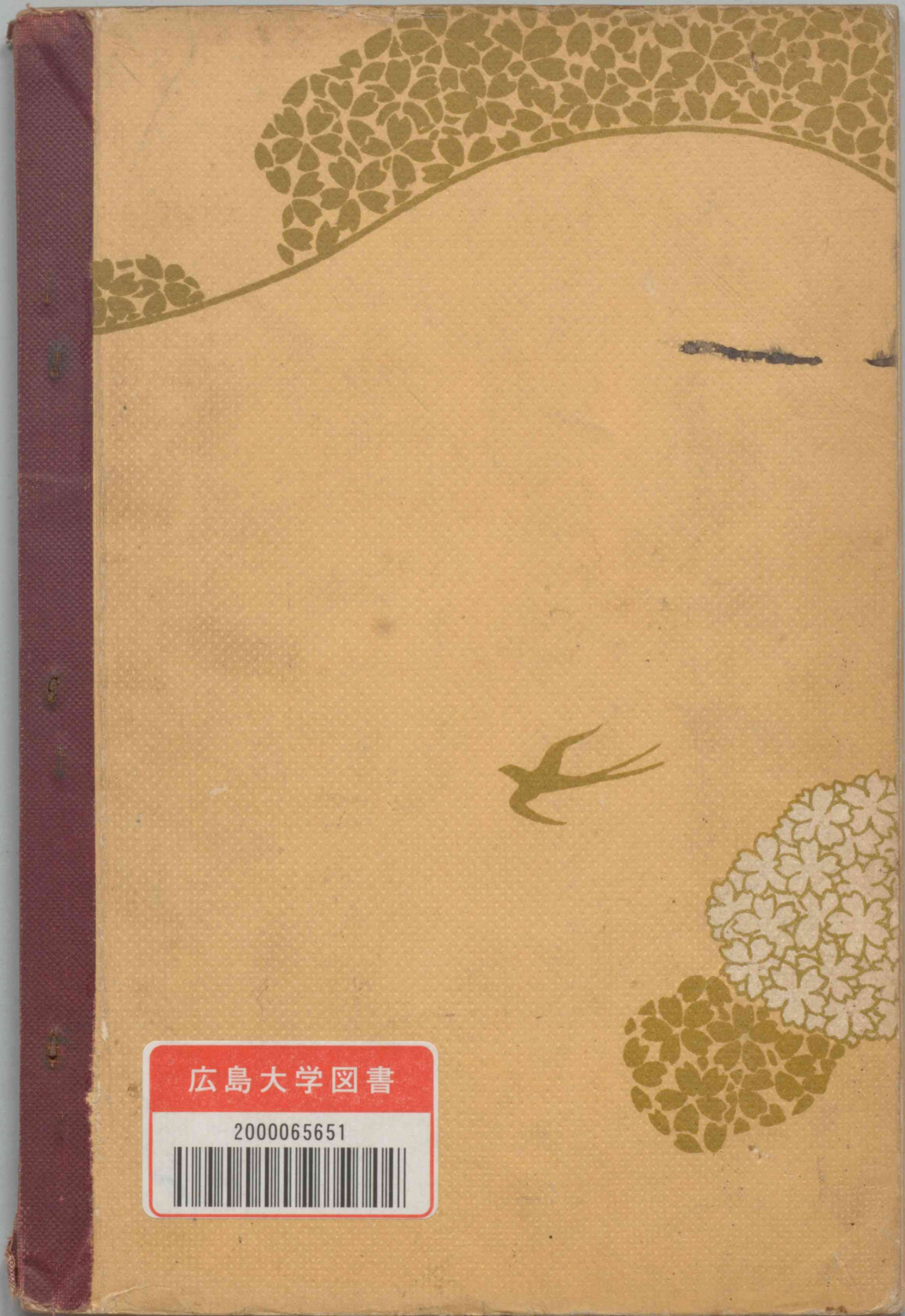
發 行 所

東京市神田區通神保町九番地

合資會社

富 山 房

電話大手六三七〇番 振替口座東京五〇一番



広島大学図書

2000065651

